長野市の埋蔵文化財第91集

裾花川扇状地遺跡群

NISHIGATA SITE ・
NAKAZAWA MEDIEVAL－CASTLE SITE

西方遺跡・中沢城館跡

－国補街路（栗田屋島線高田）事業地点－

１９９８年3月

長野市教育委員会

序

長野市において、平成10年２月７日から16日間の熱戦がくりひろげられた第18回オリンピック冬季競技大会と、３月５日から10日間にわたり感動のドラマを魅せてくれた第７回パラリンピック冬季競技大会も、数多くの人々のご協力により大成功のうちに閉幕することができました。

思い起こせば平成３年６月15日の開催都市決定以来、高速道路や新幹線の開通、オリンピック会場周辺の道路整備など、オリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなり、当市をとりまく環境も急激に変化いたしました。しかしながらこうした激変の片隅で、地中に埋もれている貴重な歴史である埋蔵文化財が、これら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております西方遺跡は、奥裾花渓谷を源流とする裾花川が平野部で形成した扇状地上に立地する裾花川扇状地遺跡群を代表する遺跡であります。開発事業の性格上、今回の調査範囲は比較的狭いものでありましたが貴重な遺構・遺物が出土しています。ここに長野市の埋蔵文化財第91集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました長野県長野建設事務所・長野市都市開発部区画整理課の皆様、工事を請負われました施工業者の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました地元作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成10年３月

長野市教育委員会
教育長　立　岩　睦　秀

例　　言

1　本書は、「国補街路（栗田屋島線高田）事業」にともない平成６年度から８年度に発掘調査を実施した緊急発掘調査報告書である。なお、平成８年度に実施した「上高田第一土地区画整理事業」による発掘調査の成果の一部も街路線内に位置することから、可能な限り記載した。

2　発掘調査は、委託者長野県長野建設事務所長　佐藤隆雄（平成６年度）・赤羽一悦（平成７・８年度）・青木忠雄（平成９年度）と受託者長野市長 塚田 佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）が実施した。なお、土地区画整理事業は長野市単独事業である。

3　発掘調査の地籍は、長野県長野市大字高田字西方である。国補街路事業の総面積は約15,000㎡で、うち埋蔵文化財の保護対象面積は約1,600㎡である。

4　西方遺跡は、国補街路事業に先立ち実施した試掘調査によって発見され、周知の埋蔵文化財包蔵地として新たに登録（B-018）されたものである。

5　現場における発掘調査は、Ａ区を矢口が担当し、その他の調査区を飯島と小野が実施した。整理調査は矢口の指導のもと小野が担当し、各調査員・作業員が各種作業を分担して行った。

6　本書の編集・執筆は、Ⅰ・Ⅱ章を飯島が、Ⅲ・Ⅳ章を矢口が担当した。

7　調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は「ＮＳＫ」と表記してある。

8　発掘調査の実施に際し、長野県長野建設事務所ならびに地元高田区の皆様には埋蔵文化財に対して深いご理解と多大なご協力を賜った。また現場調査および整理調査において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。

長野県土木部長野建設事務所建設課　小林秀樹、小林政広、本井宏宣

上高田区区長　中沢武彦、川端区区長　前島忠治

青木一男、臼居直之、小野紀男、小林秀夫、土屋　積、広田和穂、前島　卓（敬称略）

凡　　例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

1　本調査において確認したすべての遺構・遺物については、その資料化の義務を果たせなかったため本書に掲載していない。しかし、できるかぎり追認できるよう基礎データはそのまま保管してある。

2　調査区の概要については、各地区毎にⅢ章2節において概述した。また、検出した遺構と出土遺物の詳細については、Ⅲ章３節において時代別および遺構別に記述した。

3　地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。調査区における座標北からの真北方向角は＋0°10′であり、また磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。

4　遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系）と、日本水準原点の標高を基準とし、㈱写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。遺構断面図の数値は標高（ｍ）を表す。

5　現場にて1／20の縮尺で基本現図を作成し、本書では基本的に1／80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。

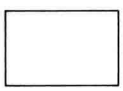
6　検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号を本遺跡に対応させて下記のとおり表示した。

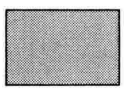
ＳＡ…竪穴住居跡、ＳＢ…掘立柱建物跡、ＳＤ…溝跡・河川跡、ＳＥ…井戸跡、ＳＨ…柵・杭列、
ＳＫ…土坑、ＳＰ…小穴、ＳＸ…性格不明遺構・竪穴状遺構、Ｔｒ…トレンチ

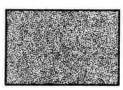
7　遺物に関しては原寸にて実測図を作成した。本書では基本的に土器実測図1/4、石製品1/2で提示した。

8　遺物写真の縮尺は任意である。番号は実測図番号と一致する。

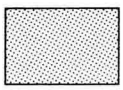
9　住居跡等の遺構実測図や土器等の遺物実測図において、焼土・炭化物等の範囲や土器の種類、黒色処理・赤色塗彩等の区別は網掛けによって下記のとおり表記した。

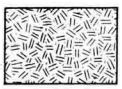

……縄文土器・弥生土器・土師器


……焼土硬化面・赤色塗彩の範囲


……焼土の範囲

……須恵器・陶磁器・灰釉陶器


……黒色処理・縄文施文の範囲


……炭化物の範囲

目　　次

序・例言・凡例・目次

Ⅰ　調査経過……1
　1　保護協議経過……1
　2　発掘調査日誌抄……3
　3　調査の体制……4

Ⅱ　西方遺跡周辺の環境……5
　1　調査地の位置と地形……5
　2　調査地周辺の発掘調査歴……7

Ⅲ　調査の成果……11
　1　試掘調査の概要……11
　2　発掘調査の方法と各調査区の概要……12
　3　西方遺跡の遺構と遺物……17
　　(1)　古墳時代前期の遺構と遺物……17
　　Ｃ４号住居址……17　Ｃ５号住居址……17　Ｃ６号住居址……17
　　Ｆ４号住居址……19　遺物観察表……19
　　(2)　古墳時代後期・奈良時代の遺構と遺物……23
　　Ａ調査区の溝址……23　Ａ２号溝址……23　Ａ６号溝址……23
　　Ａ７号溝址……23　Ａ調査区の土坑……23　その他の遺物……23
　　遺物観察表……26
　　(3)　平安時代の遺構と遺物……27
　　Ａ１号住居址……27　Ａ２号住居址……27　Ｃ１号住居址……27
　　Ｃ２号住居址……27　Ｃ３号住居址……28　Ｃ調査区検出面の遺物……28
　　Ｆ１号住居址……28　Ｆ２号住居址……28　Ｆ３号住居址……28
　　Ｆ５号住居址……28　Ｆ１号土坑……29　遺物観察表……31
　　(4)　時期不明その他の遺構……31
　4　中沢城館跡の遺構と遺物……32
　　(1)　試掘調査と表採遺物……32
　　(2)　地形図による城館域の復元……33
　　遺物観察表……33

Ⅳ　まとめ……34

報告書抄録・奥付

挿　図　目　次

１図　調査地位置図 …… 5
２図　長野市防災基本図地形分類図 …… 6
３図　調査地周辺の字境図 …… 6
４図　両方遺跡周辺の遺跡分布図 …… 8
５図　平成６年度試掘坑（トレンチ）位置図 …… 11
６図　平成６年度試掘坑（トレンチ）土層柱状図 …… 12
７図　調査区配置図 …… 13
８図　調査区配置図 …… 14
９図　Ａ・Ｂ遺構分布図 …… 14
１０図　Ｃ・Ｄ・Ｅ区遺構分布図 …… 15
１１図　Ｆ・Ｇ・Ｈ区遺構分布図 …… 16
１２図　古墳時代前期住居址実測図 …… 18
１３図　古墳時代前期住居址 …… 19
１４図　古墳時代前期土器実測図 …… 20
１５図　古墳時代前期土器実測図 …… 21
１６図　古墳時代前期土器実測図 …… 22
１７図　古墳時代後期末～奈良時代、平安時代（ＡＳＡ２）遺構実測図 …… 24
１８図　古墳時代後期末～奈良時代土器滑石製品実測図 …… 25
１９図　平安時代住居址実測図 …… 29
２０図　平安時代土器実測図 …… 30
２１図　中沢城址表採土器実測図 …… 32
２２図　中沢城館跡及び周辺の地形図 …… 32

Ⅰ　調査経過

1　保護協議経過

調査地の所在する長野市高田地区は、ＪＲ信越本線長野駅東口から約1.2km、徒歩約15分間という恵まれた交通環境にある閑静な住宅街である。長野駅から一直線に続く主要地方道栗田屋島線（現長野須坂インター線）は、当地区を東西に横断し交通量の激しい通称東通りと国道18号線を繋いでいる。そのため、道幅６ｍという狭い生活道路にも関わらず交通量が多く、路線バスのみならず普通乗用車同士のすれ違いにも支障をきたしており、長野市立桜ヶ岡中学校の通学路という観点からも、きわめて危険な道路であった。

平成５年３月の上信越自動車道の開通を契機として、須坂長野東インターチェンジと長野駅を一直線に繋ぐ主要幹線道路としての整備が本格化した。長野県土木部長野建設事務所（以下、建設事務所）が主管する国補街路事業（栗田屋島線高田）である。なお、同一路線の南側一部を斜めに分断する形で、長野市施工の上高田第一土地区画整理事業（以下、区画整理事業）の事業地が該当している。その部分については、主管課である長野市都市開発部区画整理課（以下、区画整理課）が建設事務所に工事発注を委託して実施された。

そもそも調査地周辺は、裾花川の氾濫原であり最近まで遺跡のないところとして認識されてきたため、「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内ではなかった。しかし、オリンピック関連事業にともなう平成5年度の芹田東沖遺跡発掘調査を契機に、「裾花川扇状地遺跡群」として注意を要する地域となったのである。

当該起因事業にともなう埋蔵文化財保護協議は、平成５年10月26日に長野県教育委員会事務局文化財課（以下、県教委）主催の保護協議に始まる。県教委と建設事務所建設課設計第一係、および長野市埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）との三者協議の際、用地買収の進捗に合わせて平成６年度に試掘を実施することが確認された。翌平成６年10月3日に開催された県教委主催の保護協議では、平成６年度までの工事施工範囲は包蔵範囲外と考えられ保護措置不要とし、平成7年度以降の施工予定範囲について試掘調査を実施することになった。

平成６年12月20日に実施した試掘調査は、２ｍ四方の坪掘りトレンチを任意の５箇所に設定した。その結果、古墳時代後期末から奈良時代にかけての遺構と遺物を検出し、合わせて周辺地形からも埋蔵文化財包蔵範囲を推定できるようになり、起因事業予定地内の一部に良好な埋蔵文化財の包蔵が認められた。

平成７年１月13日付６長建第1070号にて、建設事務所長より文化財保護法（以下、法）第57条の３第１項の規定に基づく文化庁長官あての通知と、長野市教育委員会教育長あての発掘調査依頼書を受理し、同日付６埋第389号にて法57条の３第１項の通知を県教委あて進達した。県教委からの保護措置として、平成７年３月６日付６教文第5-318号にて発掘調査の実施の回答を得る。同年１月13日付で建設事務所長と長野市長との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」（契約額2,000,000円）を締結し、同月17日から27日にかけて平成6年度分として個人宅地跡（Ａ区）の発掘調査を実施した。保護対象面積は400㎡で、うち200㎡を発掘調査した。中沢城館跡推定地については、試掘調査の結果削平および攪乱が著しく面的な発掘調査の実施は困難であると判断した。よって、工事施工に合わせて堀跡を確認するための帯状トレンチを設定することとし、同年２月24日に実施した。同年２月１日付６埋第392号にて「発掘調査終了届」と「埋蔵物の拾得について」の届出を関係機関へ提出し、同年３月２日付６教文第4-270号にて県教委から「埋蔵物の文化財認定」を受けた。同年３月17日付６埋第447号にて建設事務所あて実績報告書（精算額1,040,705円）を提出し、平成６年度分の発掘調査事業を終了した。

平成７年度は、平成７年４月４日および同月17日に、平成７年度分の発掘調査の実施工程と中沢城館跡推定地

部分の工事立会い、ならびに先線施工区の試掘調査実施について建設事務所と電話にて協議した。その結果現道路部分（栗田屋島線）については、NTT ケーブル・上水道管等の埋設占有物が敷設され、既に破壊を受けていることから調査対象より除外し、道路拡幅部分についてのみ記録保存を目的とした発掘調査を実施することとした。同月21日付で建設事務所長と長野市長とで「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」（契約額5,000,000円）を締結し、同月24日から５月10日かけて施工の急がれる自動車整備工場跡地（Ｂ区）の第１期分の発掘調査を実施した。さらに西側の個人宅地部分のＣ・Ｄ区は、第２期分として６月５日～７月15日に発掘調査を実施した。保護対象面積は2,000㎡で、うち800㎡を発掘調査した。中沢城館跡部分の立会い調査については、平成６年度と同様平成８年２月９日にトレンチ調査を実施した。なお同日、関連する市施工の区画整理事業予定地内でも試掘調査を実施している。同日付７埋第333号にて「発掘調査終了届」と「埋蔵物の拾得について」の届出を関係機関へ提出し、翌平成８年10月11日付７教文第4-129号にて県教委から「埋蔵物の文化財認定」を受けた。平成８年２月22日付７埋第338号にて埋蔵文化財発掘調査委託契約の変更について建設事務所と協議し、委託契約額を3,700,000円に減額する「変更委託契約書」を締結した。同年３月29日付７埋第363号にて建設事務所あて実績報告書を提出し、平成７度分の発掘調査事業を終了した。

平成８年度分の発掘調査については、平成７年10月13日に実施された県教委主催の三者協議において、関連する区画整理事業との調整により、区画整理事業地内の当該道路部分も建設事務所において一括して工事発注する方針が示された。平成８年９月24日の建設事務所との保護協議では、同年10月中旬頃の発掘調査実施を打ち合わせている。同日付けで受理した法第57条の３第１項の規定に基づく通知を、翌25日付８埋第228号にて県教委あて進達した。同年11月８日付８教文第5-269号にて県教委から発掘調査実施を内容とする回答を得る。同年９月24日付８長建第684-1号にて建設事務所長より依頼を受けた発掘調査の実施について、当該年度の保護対象面積700㎡のうち、280㎡以上を発掘調査する計画で調整を進めてきたが、用地買収交渉難航を理由に保護対象面積の縮小と発掘調査開始時期の延期を建設事務所から求められた。これにより同年11月14日付で締結した「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」は、保護対象面積280㎡のうち112㎡以上を発掘調査する内容に変更して締結した。委託契約額は600,000円である。発掘調査は同年12月13日から27日まで桜ヶ岡中学正門前の桜並木より西側をＨ区として実施した。さらに西側の先線となる南八幡川と現道との狭小な部分については、工事工程との調整から平成９年２月25日に工事立会い調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵が認められないことを確認した。なお、Ｅ～Ｇ区は同一路線となる区画整理事業地内の調査区に命名している。

同月27日付８埋第342・343号にて「発掘調査終了届」と「埋蔵物の拾得について」の届出を関係機関へ提出し、翌３月24日付８教文第4-203号にて県教委から「埋蔵物の文化財認定」を受けた。同月21日付８埋第356号にて建設事務所あて実績報告書を提出し、平成8年度分の発掘調査事業を終了をもって現地におけるすべての発掘作業を終了した。

平成９年度は埋文センターにて整理調査を実施した。平成９年４月22日付９長建第120号にて建設事務所長より依頼を受け、同月30日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」（契約額2,000,000円）を締結した。平成６年度より継続実施してきた発掘調査の成果について、整理・分析・記録化を行い、発掘調査報告書として平成10年３月13日に本書を刊行した。同日付９埋第225号にて建設事務所あて実績報告書を提出し、すべての発掘調査事業を完了した。

2　発掘調査日誌抄

[1994(平成６)年度]

１月17日(月)　Ａ区重機による表土剥ぎ開始（～20日）。
１月19日(水)　作業員投入。遺構検出後、遺構調査。
１月21日(金)　ＳＡ終了し、ＳＤ群の調査開始。
１月26日(水)　遺構調査終了。遺物洗浄。遺構等測量。
１月27日(木)　遺構図結線。遺物洗浄。器材撤収。Ａ区調査終了。

[1995(平成７)年度]

４月24日(月)　Ｂ区重機による表土剥ぎ開始（～25日）。
４月26日(水)　作業員投入。遺構検出後、遺構調査。
５月１日(月)　雨天休業。
５月２日(火)　遺構調査継続。
５月９日(火)　全体写真撮影。遺構測量。
５月10日(水)　遺構図結線。Ｂ区調査終了。
６月５日(月)　Ｃ・Ｄ区重機表土剥ぎ開始（～７日）。
６月12日(月)　作業員投入。Ｄ区遺構検出。
６月14日(水)　Ｃ区遺構検出。遺構調査開始。
６月15日(金)　ＳＡ１等調査。
６月23日(金)　Ｃ区１次面全体写真撮影。
６月27日(火)　Ｃ区１次面遺構測量。
６月28日(水)　Ｃ区２次面へ重機投入。Ｄ区全体写真撮影。
６月29日(木)　Ｃ区２次面検出。遺構調査開始。
６月30日(金)　雨天休業（～７月６日）。
７月７日(金)　ＳＡ２～５調査。
７月11日(火)　ＳＡ４遺物出土状況写真撮影。
７月13日(木)　遺構測量。
７月15日(土)　全体写真撮影。器材撤収。現地調査終了。

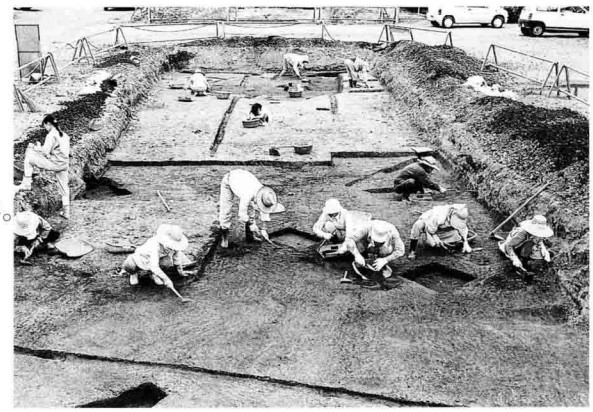
[1996(平成８)年度]

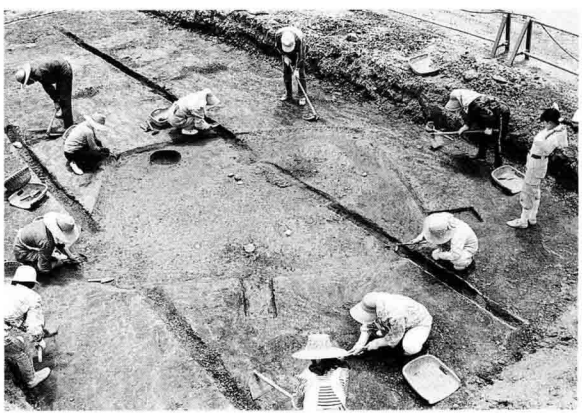
12月13日(金)　Ｈ区重機による表土剥ぎ開始（～25日）。
12月16日(月)　作業員投入。遺構検出後、遺構調査。
12月19日(木)　下層確認トレンチ掘削。
12月25日(水)　全体写真撮影。
12月26日(木)　遺構測量。器材撤収。
12月27日(金)　遺構図結線。Ｈ区調査終了。

現地におけるすべての調査を終了。

Ｉ－１　Ａ区の調査

Ｉ－２　Ｂ区の調査


Ｉ－３　Ｃ区の調査


Ｉ－４　Ｃ区の調査

3　調査の体制

長野市における埋蔵文化財の保護措置については、史跡等の整備事業にかかわる学術調査を長野市教育委員会社会教育課が担当し、各種開発行為にともなう緊急調査は埋蔵文化財センターが担当している。本発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施した。

［平成６～９年度］

調査主体者　長野市教育委員会教育長　滝沢忠男（～Ｈ８）・久保　健（Ｈ８～）

調 査 機 関　埋蔵文化財センター所長　荒井和雄（Ｈ６）・丸田修三（Ｈ７～９）

主幹兼所長補佐　鈴木貞男（Ｈ６）・小林重夫（Ｈ９）

所長補佐（庶務担当）　山中武徳（～Ｈ６）・小林重夫（Ｈ７～８）

所長補佐（調査担当）　矢口忠良

庶 務 係（係　長　山中武徳・小林重夫）

事 務 員　青木厚子

調 査 係（係　長	矢口忠良）	専 門 員	山田美弥子
（係　長	青木和明、Ｈ９、文化課兼務）	専 門 員	寺島孝典（～Ｈ７）
主　査	青木和明（Ｈ６～８）	専 門 員	西澤眞弓
主　査	千 野　浩（Ｈ８～）	専 門 員	小野由美子（調査員）
（主　事	千 野　浩）	専 門 員	田村直也（Ｈ６）
主　事	飯島哲也（調査主任）	専 門 員	永井洋一（Ｈ７）
主　事	風間栄一（遺物写真）	専 門 員	堀内健次（Ｈ７～）
主　事	小林和子	専 門 員	藤田隆之（Ｈ７～）
専門主事	太田重成（Ｈ６）	専 門 員	宮川明美（Ｈ８～）
専門主事	清水　武（～Ｈ９）	専 門 員	小林まゆ佳（調査員、Ｈ８～）
専 門 員	中殿章子	専 門 員	勝田智紀（Ｈ８）
専 門 員	笠井敦子（Ｈ６）		

調　査　員　青木善子・武藤信子・矢口栄子

発掘作業員　池田賢二、北村宣之、倉石光将、神頭幸雄、小林紀代美、小林利夫、小林春枝、小山さと子、小山富田守、酒井文夫、佐々木慶子、佐藤ひで子、清水八郎、鈴木友江、高橋　薫、滝沢政子、武田モト子、伝田末子、徳竹勇次、富岡実子、中條悦子、中村　清、中村邦男、中村納子、成田恵理子、橋爪孝次、松木よしみ、三上文子、美谷島昇、宮原千治、宮原孝子、山室やすい、横川甚三、吉原幸子、脇坂智子、和田千代子、和田文雄

整理作業員　池田見紀、石田利明、岡沢治子、勝田千亜紀、倉島敬子、小泉ひろ美、関崎文子、田中はま江、田中むつ子、多羅沢美恵子、塚田容子、徳成奈於子、富田景子、鳥羽徳子、西尾千枝、橋爪孝次、松沢ナオエ、三好明子、向山純子、武藤信子、村松正子

遺構測量委託　株式会社写真測図研究所　代表取締役　杉本幸治

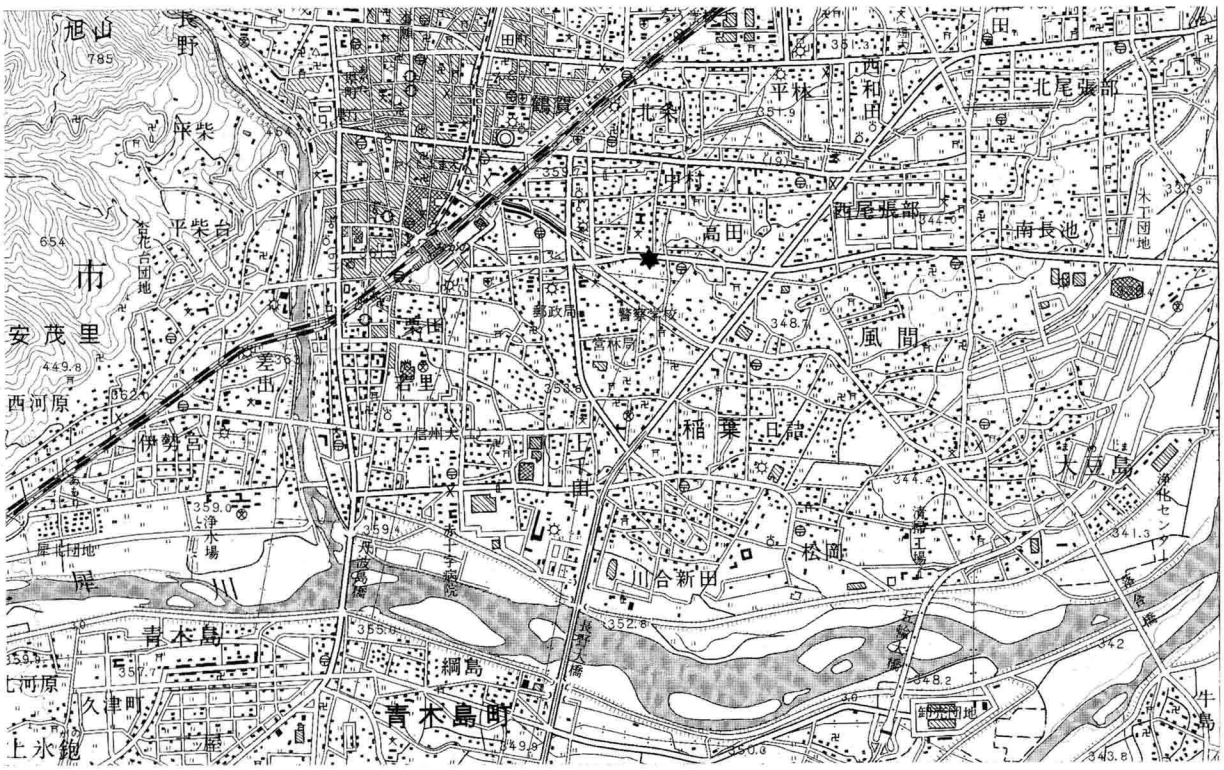
Ⅱ　西方遺跡周辺の環境

1　調査地の位置と地形

長野県の県庁所在地である長野市は県の北部にあり、総面積404.35㎢、人口約36万人の地方中核都市である。地形および地質的には、中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、西側の西部山地（通称西山）、東側の東部山地（河東山地）に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約1000万～200万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約40km・最大幅約10km・標高330～360mである。第四紀中ごろに形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

ミズバショウの群生地として有名な奥裾花渓谷を源流とする裾花川は、長野市街地に入り流路を南に変え、犀川と直交するように合流する（1図）。これは慶長年間（1596～1615年）に、松代藩城代家老の花井吉成・吉雄父子により新規開削の河川改修がなされたもので、それ以前は長野市街地を東南方向に流れていた。現在の北八幡川・南八幡川・古川・計渇川・宮川の各流路は旧裾花川河道跡の微低地帯に導かれており、調査地付近の字境図（3図）にも、川原・前河原などの古字名から、七瀬から連続する旧裾花川の河道だったことが推測される。

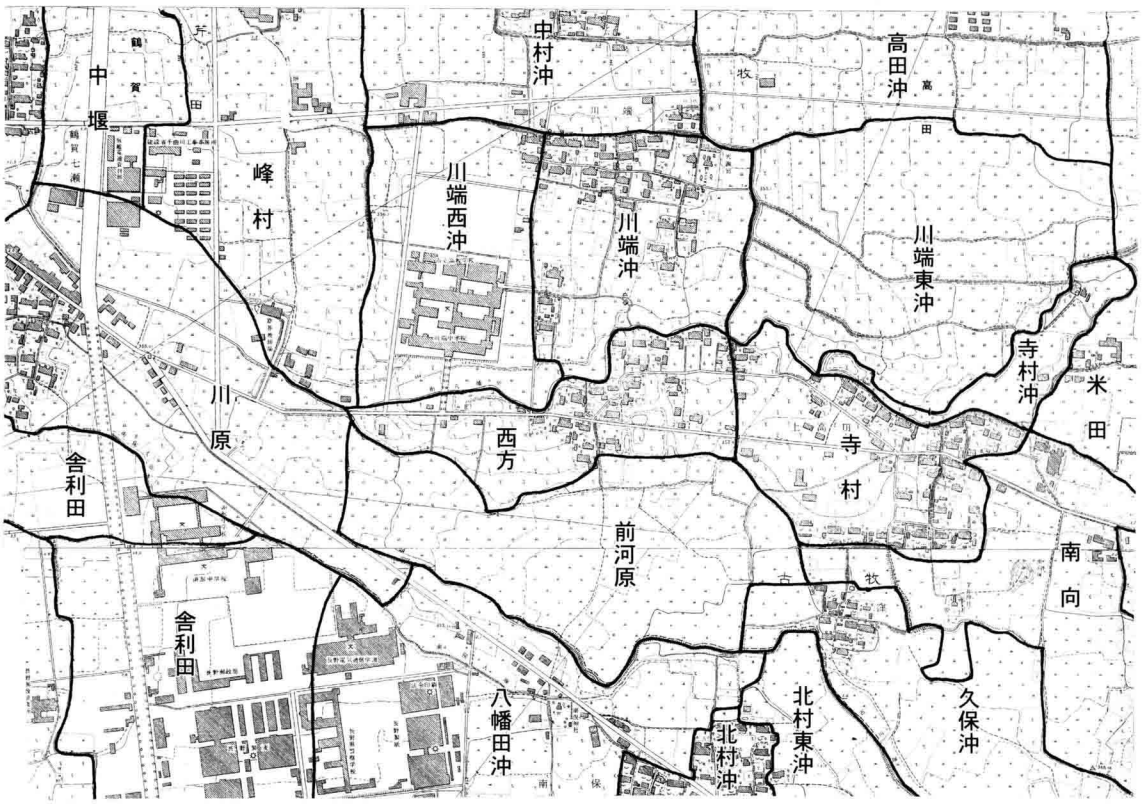
裾花川扇状地は旭山北麓の里島付近を扇頂部として、北は善光寺下～平林～北尾張部辺りで浅川扇状地との複合扇状地を形成する。南は若里～川合新田辺りで犀川氾濫原と接しながら東の千曲川氾濫原に向かって、100分の1程度の勾配で東南方向になだらかに傾斜している。扇頂部にあたる市街地西部では、裾花川に沿って数段の河岸段丘が形成されている。最高段丘には左岸に往生寺地籍、右岸に平柴地籍が立地し、第2段丘には新諏訪町地籍が立地し、第3段丘には長野商業高等学校、第4段丘には長野県議員会館などが建てられている。扇央部か



1図　調査位置図（1：50,000）

Fg 緩扇状地　Fb 扇状地内の微高地　Fs 扇状地内の低地　f 氾濫平野　o 旧河道

2図　長野市防災基本図地形分類図（1：25,000）



3図　調査地周辺の字境図（1：10,000：地形図は大正15年測量・昭和27年修正）

ら扇端部にかけては、比高差２～４ｍ程度の低い崖が扇状地の傾斜方向に長く続いている。これらはかつて裾花川が扇状地面を刻んで流れた痕跡と考えられ、こうした地形から「長野」の名の起こりとする説もある。調査地の所在する西方と前河原、南向と久保沖の境は比高差１～２ｍ程度の浸食段丘が明瞭である。高田の名のとおり同一微高地上となる西方・寺村・南向には、それぞれ西方遺跡・寺村遺跡・南向塚古墳が立地し、古代からの土地利用がなされていた。扇状地南縁の若里にも犀川の側方浸食段丘が続いている（２図）。

このような地形のため高田地区もたびたび水害に見舞われている。1742（寛保２）年８月の、いわゆる「戌の満水」では裾花川・北八幡川・南八幡川の各所が押し切られ、北高田村では14戸が浸水、80石の田畑が砂を被ったという。1891（明治24）年７月18日には大雨のために裾花川の堤防が芹田村字岡田で決壊し、久保沖の田んぼが一面水没したという。現在は平林・北条地籍に24,000㎡、遊水量90,000ｔという北八幡川雨水調整池が建設され、大規模な水害は発生していない。

今回の発掘調査地点は長野市大字高田字西方に所在し、旧裾花川の河道と考えられる前河原に隣接する島状に形成された微高地上と考えられ、試掘調査による発見を契機に字名を冠して「西方遺跡」と命名した。

参考文献　長野市誌編さん委員会　1997　『長野市誌』第１巻　自然編　長野市

２　調査地周辺の発掘調査歴

西方遺跡の属する裾花川扇状地遺跡群（４図）は、市街地中心部に近いこともあり早くから住宅地あるいは商業地として機能していた。また、扇状地上の厚い堆積物に覆われ地表面での遺物散布状態や微地形の観察による遺跡範囲の推定が困難な地域であった。近年の市街地再開発事業などの土木工事にともない遺跡の新発見も含めてようやく遺跡範囲の推定が可能な状況となってきた。

１　西方遺跡　―国補街路地点―（本書）

平成６年度から８年度にかけて、道路拡幅部を発掘調査した。堰や進入路の確保等から調査地は不連続でトレンチ的なものである。時期が判明できる遺構は、古墳時代前期住居址３軒、古墳時代後期末から奈良時代溝址１条、奈良時代溝址２条・土坑１基、平安時代住居址９軒を検出した。

２　西方遺跡(2)　―上高田第一土地区画整理事業地点―

市施工の長野市上高田第一土地区画整理事業にともない、平成８年度以降継続調査が予定されている。８年度の発掘調査では古墳時代前期住居址１軒、平安時代住居址４軒・土坑１基を検出している。近世以降と思われるカクランも著しく、またきわめて狭長な調査区が多いため、全容が判明した遺構はほとんどない。

３　中沢城館跡―国補街路地点―（本書）

近年の造成・開発によって現状地形からは遺構の痕跡を見ることはできないが、古い地形図には堀跡や土塁が表現されている（22図）。また以前より、カワラケなどの土器片が大量に採集できる場所として知られていた。

４　寺村遺跡

民間事業所建設工事に先立って約400㎡が発掘調査され、平安時代の住居址6軒などが確認された。10世紀中頃から11世紀前半まで連続する集落遺跡と考えられる。

５　南向塚古墳

別名王塚・直塚山・ながめ塚などとよばれ、長野市誌編さん事業の一環として墳丘測量調査が実施された。墳丘の形は切頭円錐形の円丘に小規模な前方部が南西につく前方後円墳とされているが，帆立貝形古墳や造出付円墳の可能性も否定できない。規模は全長46ｍ・後円部の直径33ｍ・後円部の高さ4.8ｍ・前方部の長さ13ｍ・幅

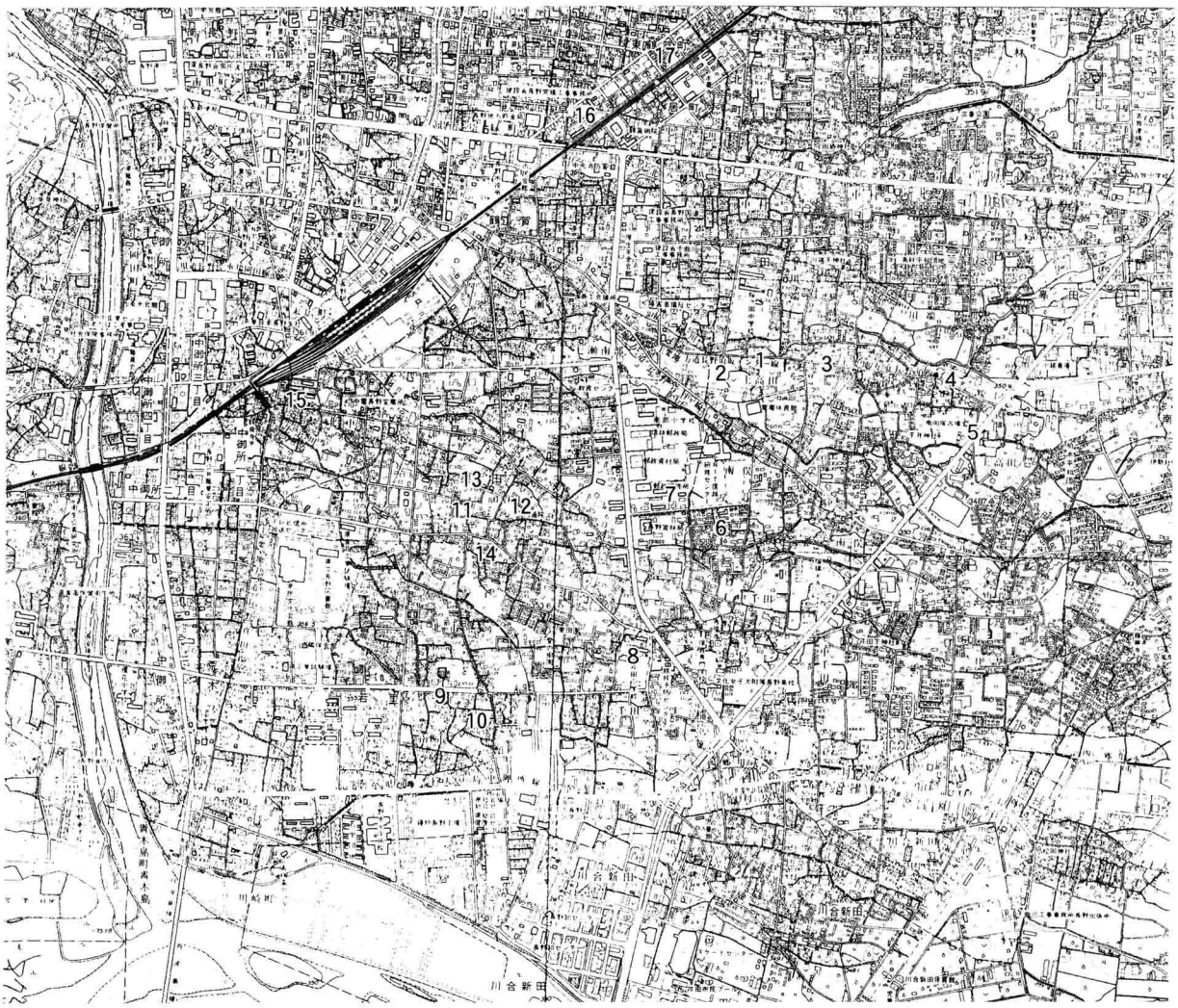
８ｍを測る。段築・葺石・埴輪等の外部施設は認められず、内部施設もいっさい不明である。1910（明治43）年頃に後円部の東北斜面からメノウ製勾玉１点が表面採集されている。また、古墳を描いたものとしては県下最古の1759（宝暦9）年に描かれた絵図面が個人宅より1979（昭和54）年に発見されている。長野盆地平野部に立地する唯一の前方後円墳であり、1969（昭和44）年に市史跡に指定された。

6　八幡田沖遺跡　－南俣住宅地造成地点－

稲葉南俣住宅地造成事業にともない、平成５年度に発掘調査、翌6年度に整理調査が実施され、弥生時代後期から平安時代までの集落跡を確認した。調査面積3,900㎡に弥生後期は溝１条、古墳前～中期は住居址６軒、古墳後期は住居址12軒・掘立柱建物跡２棟、奈良～平安は住居址７軒の遺構が検出されている。特に14号住居址は古墳前期後葉の焼失住居で、良好なセット関係が提示できる該期土器群が出土している。

7　八幡田沖遺跡(2)　－信越郵政研修所地点－

信越郵政局研修所庁舎新築工事に先立ち、平成６年度に発掘調査を実施した。発掘調査面積190㎡の範囲に、奈良～平安時代前半の掘立柱建物跡１棟、溝址２条、土坑１基が検出されている。



1　西方遺跡	2　西方遺跡(2)	3　中沢城館跡	4　寺村遺跡
5　南向塚古墳	6　八幡田沖遺跡(1)	7　八幡田沖遺跡(2)	8　芹田小学校遺跡
9　芹田東沖遺跡(1)	10　芹田東沖遺跡(2)	11　東番場遺跡	12　栗田城跡
13　栗田城跡(2)	14　栗田城跡(3)	15　御所遺跡	16・17　浅川扇状地遺跡群

4図　西方遺跡周辺の遺跡分布図（１：20,000）

8　芹田小学校遺跡

1986（昭和61）年に、校舎増改築にともなって発掘調査が実施され、平安時代後半の住居址２軒・溝址２条などが確認された。住居址は共に一辺が８ｍ代と６ｍ代であり、比較的大型に属すものである。古代芹田郷との関係が推測されている。

9　芹田東沖遺跡(1)　－栗田安茂里線地点－

都市計画道路栗田安茂里線建設事業にともない、平成4年度に1,300㎡が発掘調査された。平安時代と思われる柱穴をともなう水田遺構と平安時代～中世の溝址4条が確認された。

10　芹田東沖遺跡(2)　－文化コンベンション地点－

長野市文化コンベンション施設等建設事業にともない、平成５度に5,200㎡、平成６年度には3,400㎡、平成７年度に1,200㎡が発掘調査された。地表下約２ｍまでに２層の遺物包含層があり、下層からは縄文～弥生時代の土器片が出土している。上層は奈良～平安時代の遺構面であり住居址44軒・掘立柱建物跡13棟以上のほか溝址１条や土坑・小穴が多数確認されている。特筆すべき出土遺物として「市寸」と墨書された須恵器坏があげられる。現在も地名として残る若里の北市・南市はもと市村であり、寸の文字に村を当てることが可能であれば水内郡芹田郷との関連や後代の市村庄成立の背景として注視されよう。

11　東番場遺跡

1987（昭和62）年に、民間宅地造成工事に先立って256㎡が発掘調査された。古墳時代前期の土坑１基、古墳時代後期の住居址２軒と土坑４基、奈良時代の土坑４基、時期不明の住居址２軒・土坑９基などが確認された。中世栗田氏の居城と考えられる栗田城（堀之内城）は東方120ｍに位置している。志野焼と思われる小皿1点も出土している。

12　栗田城跡　－グランドハイツ地点－

1990（平成２）年に、グランドハイツ東公園建設工事に先立って800㎡が発掘調査された。栗田城内郭部と推定される位置に、80基におよぶ土坑と柱穴群、それらにともなう400点以上の中世遺物が確認された。出土遺物の主な時期は14世紀代から15世紀前半であり、文献史料における栗田氏関係の記述との整合性がうかがえる。

13　栗田城跡(2)　－上條器械店建築地点－

1993（平成５）年に、北陸新幹線建設事業にともなう代替地としての上條器械店新築工事に先立ち、約500㎡が発掘調査された。栗田城の外郭部と推定される位置であり、溝址３条と多数の土坑と柱穴群が検出されている。なかでも溝址から出土した古瀬戸天目茶碗はほぼ完形の優品である。

14　栗田城跡(3)　－土木事業代替地地点－

1994（平成６）年に、長野県土地開発公社の委託により土木事業用地代替地先行取得事業にともなって約300㎡が発掘調査された。栗田城の外郭部と推定される位置であり、上層は15世紀末から16世紀前半、下層は14世紀代という２面の遺構面を検出した。上層面では土坑４基・溝址２条と若干の柱穴群、下層面では竪穴状遺構１基・土坑７基・溝址２条が検出されている。

15　御所遺跡　－鉄道学園跡地地点－

長野駅周辺第二土地区画整理事業にともない、平成６年度に2,100㎡、平成７年度に1,100㎡が発掘調査された。調査地は中世信濃守護小笠原氏の館跡と推定されている場所であり、検出した遺構面２面のうち、上層面では中世館周辺部の居住域を示唆する柱穴群や溝址・土坑が検出され、館跡に関連すると考えられる大溝も確認されている。下層面では古墳時代後期の住居址60軒・溝址10条、奈良～平安時代の住居址14軒・溝址６条などである。特筆すべき出土遺物として古墳時代の金箔板や玉類、皇朝十二銭の富寿神寶がある。

16・17　浅川扇状地遺跡群　－北陸新幹線地点－

平成５年度から長野市北部においても本格的に着手された北陸新幹線の建設工事は、浅川扇状地遺跡群の扇端部を横断する形で貫き、これにともなう発掘調査が(財)長野県埋蔵文化財センターで実施している。これによれば、ほぼ全域にわたって埋蔵文化財の包蔵を確認することでき、Ｗ２区（早苗町、16）調査区からは弥生時代中期後半の竪穴住居跡８軒・溝跡31条・土坑50基、古墳時代前期の竪穴住居跡23軒・掘立柱建物跡１棟・土壙墓３基・溝跡17条、土坑66基などが検出されている。またＷ３区（東鶴賀町、17）からは住居址18軒（弥生時代中期後半３軒・弥生時代後期１軒・古墳時代前期５軒・古墳時代後期３軒・時期不明６軒）、時期不明の掘立柱建物跡５棟・柵列1条・溝址17条、土坑79基などが検出されている。

このように今回の調査地点は、これら周辺の発掘調査と合わせて裾花川扇状地遺跡群の中でも近年集中して発掘調査された地域であり、今後個々の遺跡を検討することによって各時代の様相が明らかになろう。

参考文献

長野市教育委員会　1993～1998『長野市埋蔵文化財センター所報』№４～９

長野市教育委員会　1987『芹田小学校遺跡』長野市の埋蔵文化財第21集

長野市教育委員会　1988『東番場遺跡』長野市の埋蔵文化財第26集

長野市教育委員会　1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第38集

長野市教育委員会　1994『栗田城跡(2)（東番場遺跡）』長野市の埋蔵文化財第61集

長野市教育委員会　1995『栗田城跡(3)』長野市の埋蔵文化財第68集

長野市教育委員会　1995『八幡田沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第70集

長野市教育委員会　1997『裾花川扇状地遺跡群　寺村遺跡』長野市の埋蔵文化財第86集

飯島哲也・風間栄一　1998「長野市南向塚古墳墳丘測量調査報告」『市誌研究ながの』第5号

(財)長野県埋蔵文化財センター　1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書５　－長野市内その2－

１　国補街路（栗田屋島線）　　２　上高田第一土地区画整理事業地　　３　南向塚古墳

４　国道18号線　　５　桜ヶ岡中学校

Ⅱ－１　調査地周辺の航空写真（平成２年６月　㈱ジャスティック撮影）

Ⅲ　調査の成果

1　試掘調査の概要

［埋蔵文化財確認調査概要報告書］

調査依頼者　長野県長野建設事務所長　佐藤隆雄

起因事業名　国補街路事業（栗田屋島線高田）

調　査　地　長野市大字高田997-1他（５図）

調　査　日　平成６年12月20日

調　査　者　長野市埋蔵文化財センター主事　飯島哲也

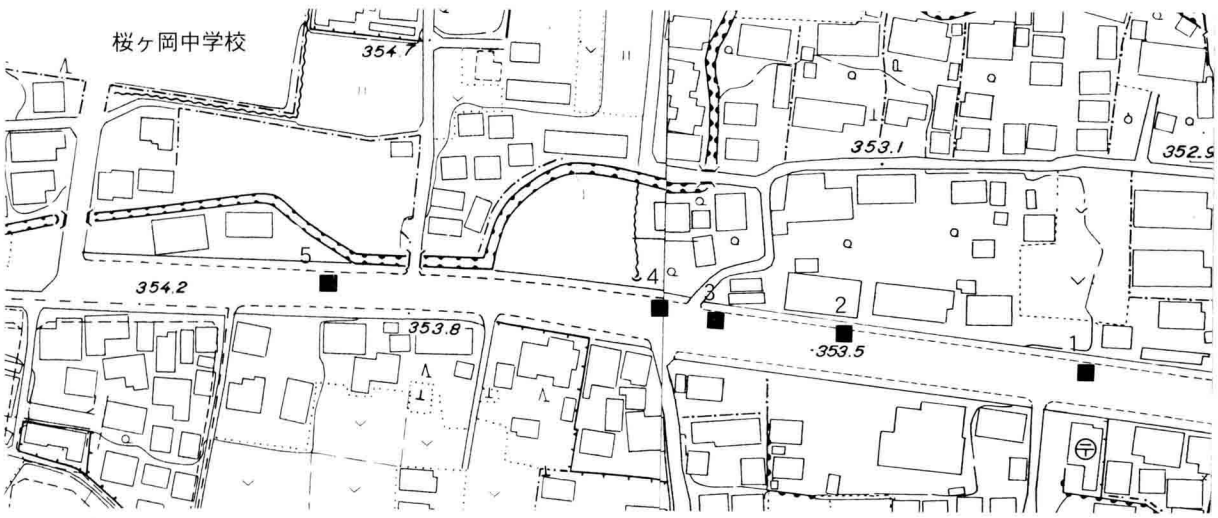
調査の目的　開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地であり、埋蔵文化財の包蔵状況によっては破壊の及ぶ可能性が考えられる。従って施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財の状況を調査する。

調査の方法　事業予定地内において埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の地点に試掘坑（トレンチ，Ｌ２ｍ×Ｗ２ｍ）を５カ所設定し、坑内断面の土層観察によって遺物包含層の有無及び深さを確認する。

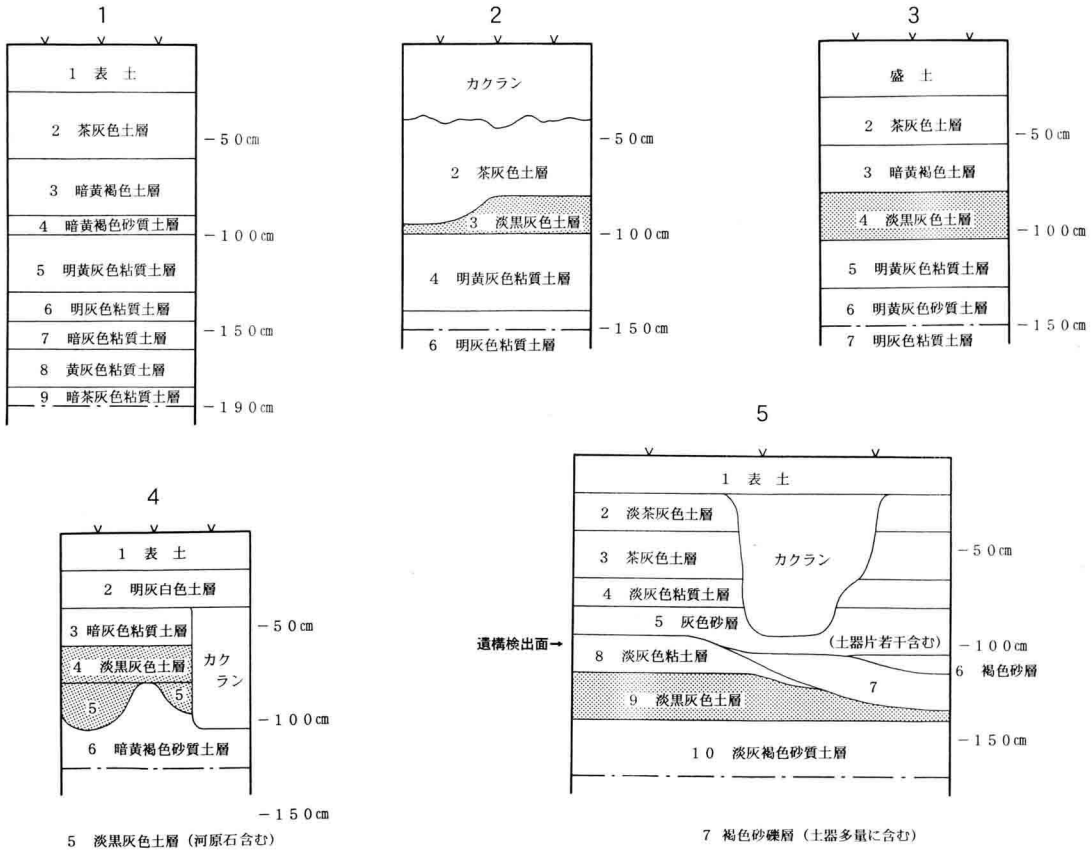
調査結果　試掘坑にて確認された堆積土層は、河川流域に見られる堆積土で砂利をほとんど含まない。第１トレンチは遺物包含層すら存在しない。第２トレンチは中世城館跡の中沢城主郭内に位置するものの撹乱が著しく基盤層は確認されない。その下層に遺物包含層らしき淡黒灰色土が堆積するが、北側より落ち込んできており不安定である。第３トレンチにても同様である。第４トレンチは明確な遺物包含層が検出されなかったものの地表下約１ｍにて溝址を確認し、須恵器横瓶をはじめ古墳時代末期から奈良時代の土器片を検出した。第５トレンチでは淡黒灰色土層が堆積しているものの土器片等は出土せず、遺構の存在も曖昧である（６図）。

以上の結果により第４トレンチ周辺には遺構・遺物が存在することは確実である。現地形から予想される遺跡の範囲は第４トレンチの西側に展開しているものと思われる。中沢城跡においては基盤層が撹乱により削平されているため面的な調査は不可能な状況にある。しかし、堀跡は残存している可能性が高いため記録保存が必要となろう。

従って開発事業着手前に埋蔵文化財の保護措置が必要と思われる。



５図　平成６年度試掘坑（トレンチ）位置図（１：2,500）



6図　平成6年度試掘坑（トレンチ）土層柱状図

2　発掘調査の方法と各調査区の概要

発掘調査の対象地は関係機関三者の保護協議（Ⅰ章1節参照）により、現道路を除く拡幅部とし、工事工程に合わせA区からH区まで調査区を設定し順次調査を実施した。国補街路事業地点を対象とする調査はA区からD区・H区で、土地区画整理事業を起因とする調査区はE区以下アルファベット順の区名である（7図）。年度別調査区は平成6年度がA区、7年度にB区～D区、8年度にE区～H区である。以下、各調査区の遺構分布状況を記述する。

A区（9図）　調査地の東端に位置する調査区で、調査面積としては最も広い調査区である。住居址2軒・7条の溝址・土坑3基を検出した。住居址は平安時代のものであるが、主軸方向は異なる。溝址の内北東から南西方向に掘り込まれた大型のSD7からは古墳時代後期末から奈良時代にかけての遺物が、同様のSD6及びSD1・2からは奈良時代の土器が出土している。土坑のSK1からも奈良時代の土器片が確認されている。こうした総体の傾向をみると、居住遺構は平安時代の所産であり、他の遺構は奈良時代を主体に機能していた遺構と考えられる。なお、SD7から古墳時代中期の所産と思われる滑石製有孔円板（18図80）が出土している。奈良時代前後の遺構の存在はこの区に集中し、居住域等は東側に展開が予想される。

B区（9図）　自動車整備工場の跡地で、撹乱が各所でみられた。明確に把握できた遺構は不整形な土坑状の掘り込み2基（SX1・2）と2条の溝址を検出したにすぎない。共に時代・時期は不明であるが、SD3から古墳時代前期に比定される小型甕形土器片（16図41）が出土している。

C区（10図）　B区から約50m程西に位置する。この調査区だけ遺構面が２面あり、上層の１次面と２次面の平安時代遺構深度差は約20cm・古墳時代前期遺構検出面まで約40cmを測る。１次面の遺構は平安時代住居址１軒（ＳＡ１）と時期不明の溝址６条・小穴が確認されているにすぎない。２次面では平安時代住居址２軒（ＳＡ２・３）及び古墳時代前期の住居址３軒（ＳＡ４～６）を検出した。これらの遺構は全面を露呈できたものはなく、全て調査区域外にのびており、規模等は不明である。

D区（10図）　調査では小穴と土坑状の落ち込みの一部が確認されたにすぎず、出土遺物もなく無遺構調査区といってもよい。

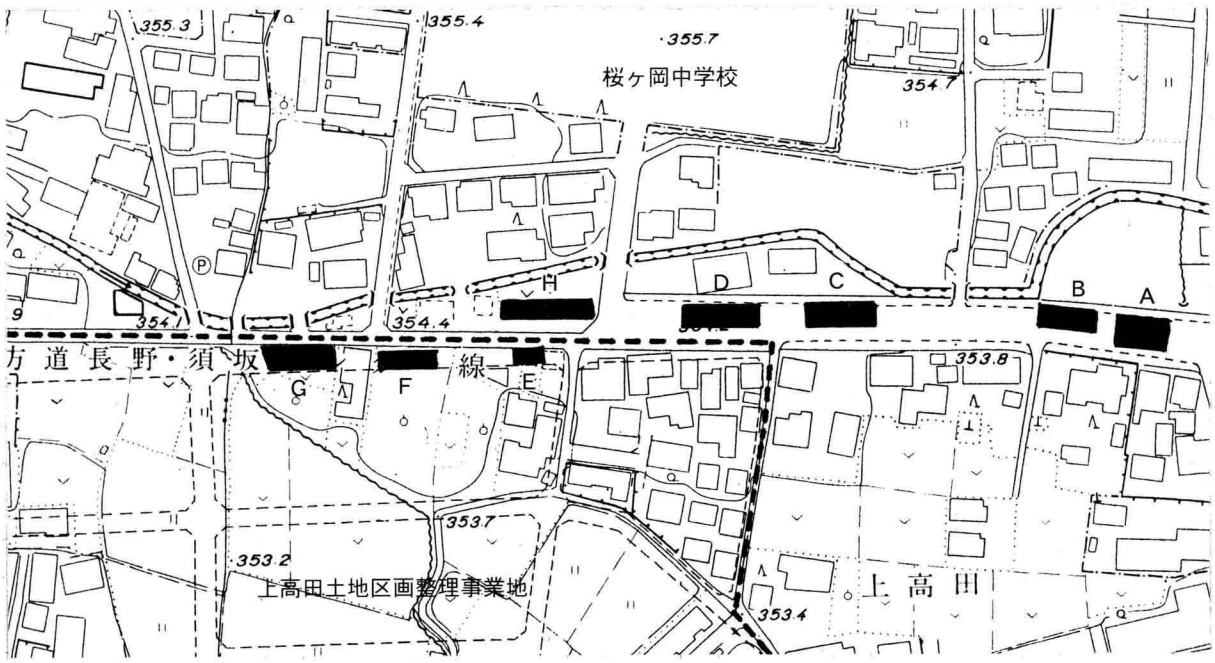
H区（11図）　桜ケ岡中学校正面入口通路の西側に位置する調査区で、水路を挟んで２小区に分かれる。東小区の調査では小穴群・溝址等を、西小区からは並列する短い溝址群を検出した。両小区共に出土遺物等は認められず、西小区の溝址群はおそらく近世以降の畑作による痕跡であろう。東小区の遺構も同様のものと考えられる。

以上が国補街路事業対応調査区である。以下の調査区は土地区画整理事業に対応するものであるが、遺跡理解のため参考までに記載する。

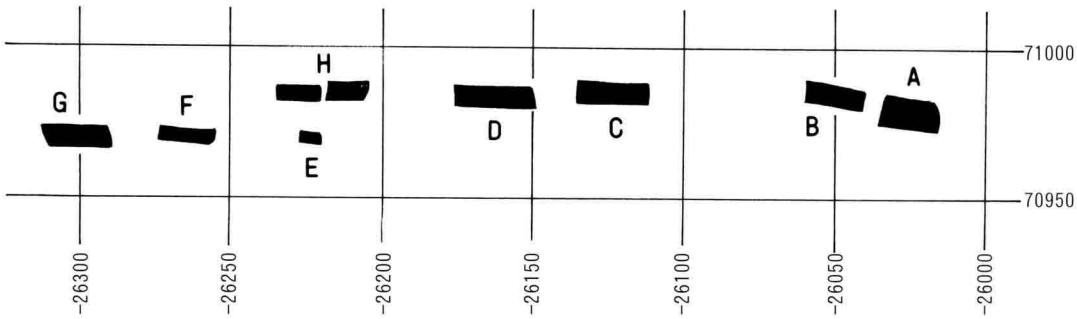
E区（10図）　H区の南に位置する。この調査区も小穴と不整形な土坑状の落ち込みを確認したにすぎない。H区同様に近世以降の畑作跡と思われる。出土遺物はない。

F区（11図）　古墳時代前期と平安時代の遺構を検出したC区から西に約120mのところに位置する。遺構面は一面で、古墳時代前期住居址１軒（ＳＡ４）、平安時代住居址４軒（ＳＡ１～３・５）と長方形土坑１基（ＳＫ１）を検出した。土坑を除き他の遺構は部分露呈の調査で、未調査部は区域外にのびている。

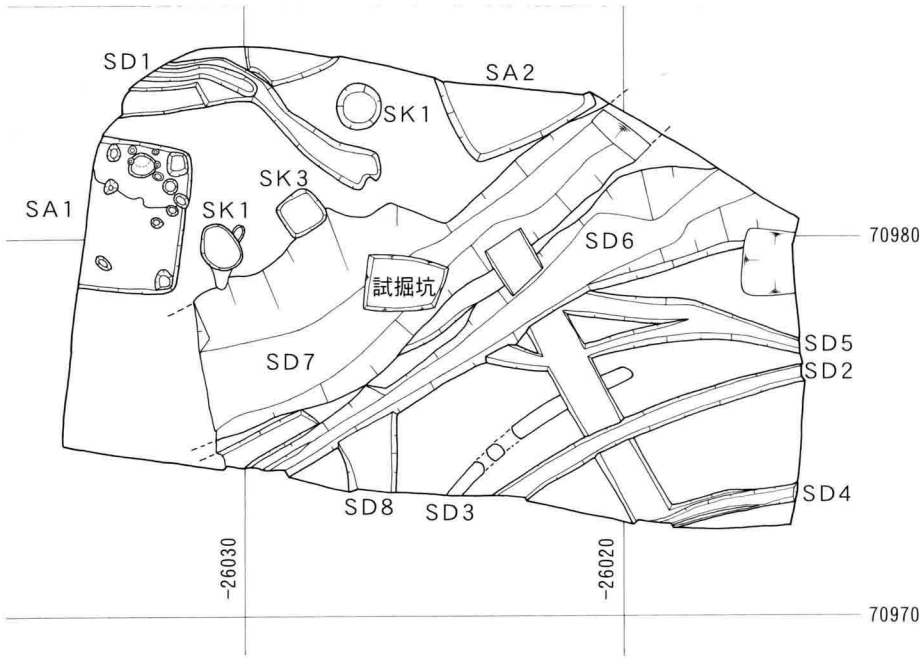
G区（11図）　旧裾花川による河岸段丘先端部に位置する調査区である。遺構は小穴や溝址が点在状態で確認できる程度のもので、出土遺物もなく、遺跡の範囲がこの調査区までおよんでいないことを示している。



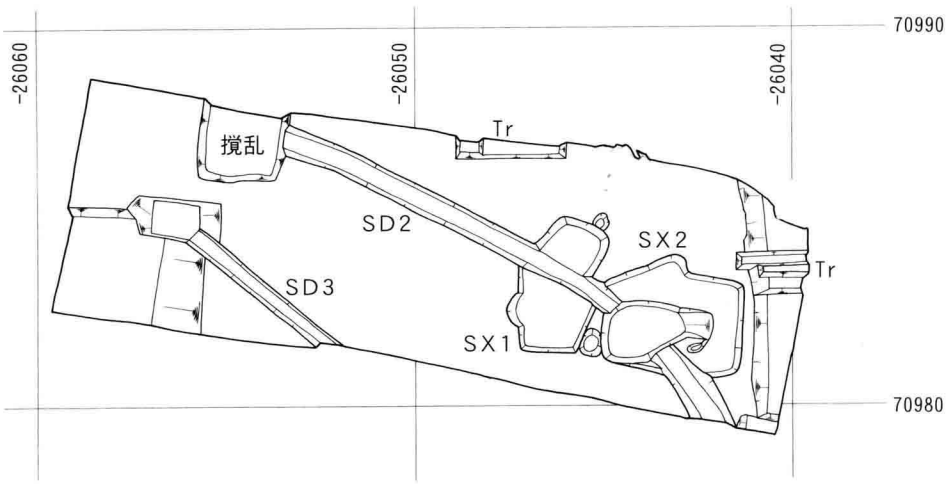
7図　調査区配置図（1：2,500）



8図　調査区配置図（1：2,500）

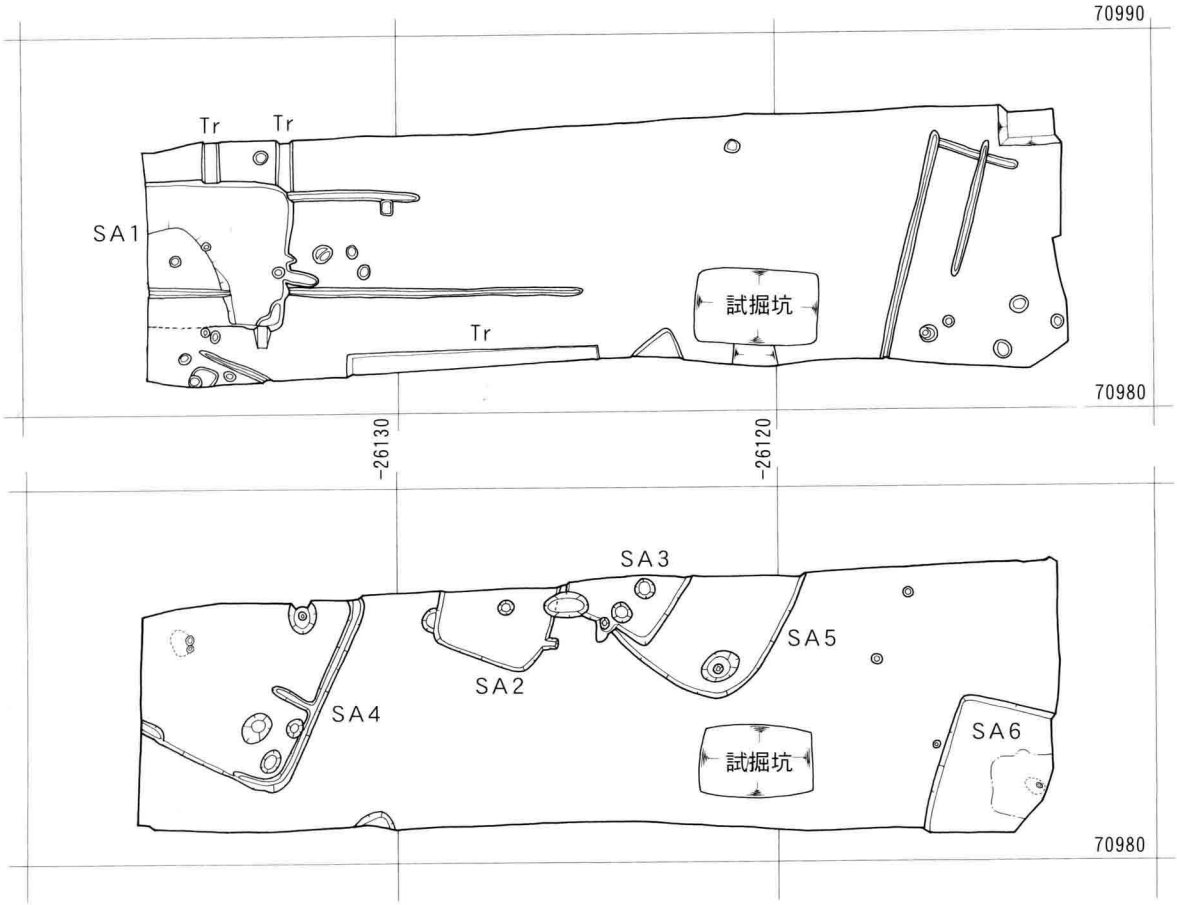


A　区

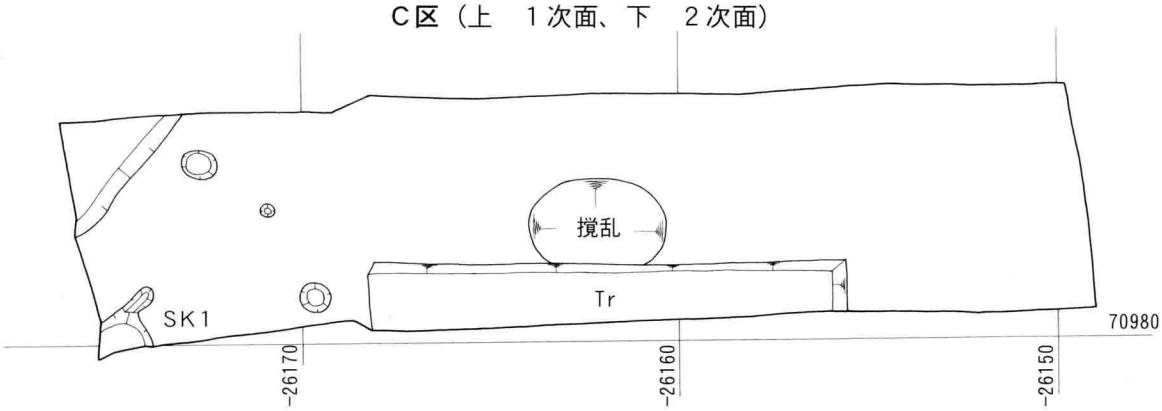


B　区

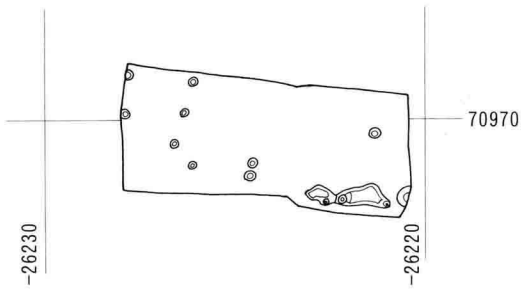
9図　A・B区遺構分布図（1：200）



C区（上　1次面、下　2次面）

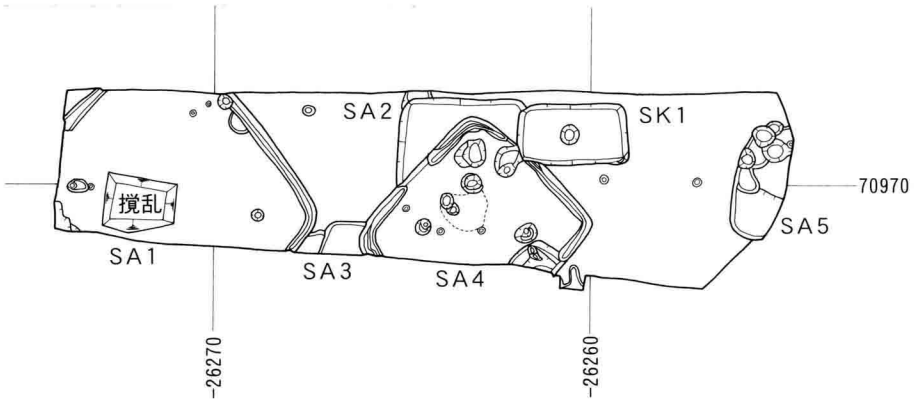


D区

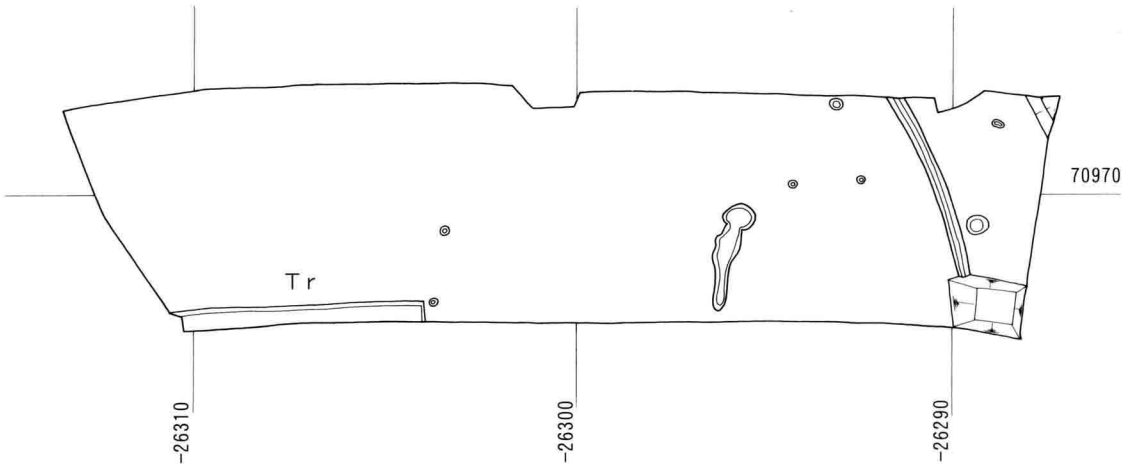


E区（土地区画整理事業他）

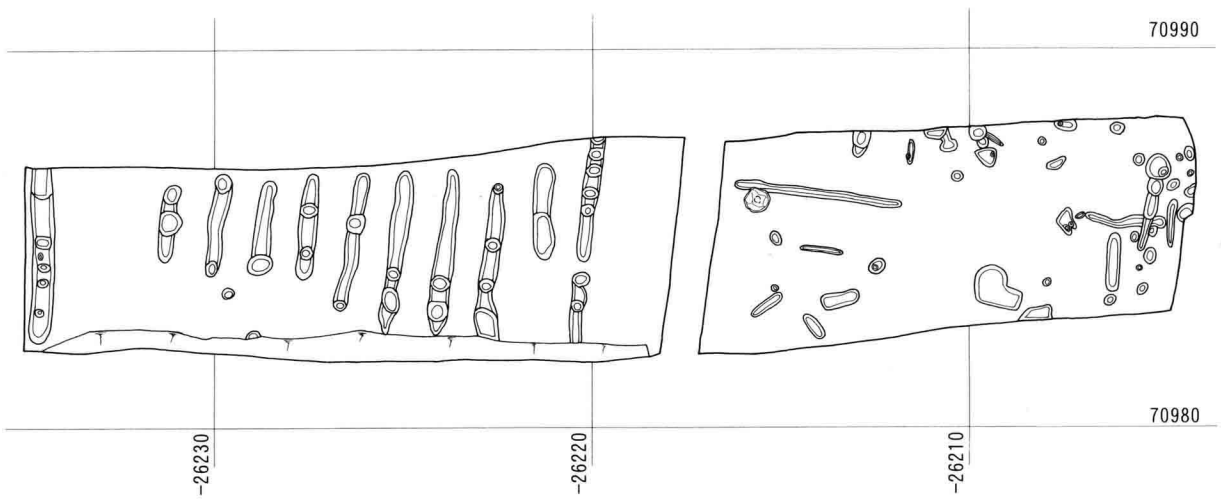
10図　C・D・E区遺構分布図（1：200）



F区（土地区画整理事業地）



G区（土地区画整理事業地）



H　区

11図　F・G・H区遺構分布図（1：200）

3　西方遺跡の遺構と遺物

(1)　古墳時代前期の遺構と遺物

Ｃ４号住居址（ＣＳＡ１）

遺構（12図）　Ｃ調査区の西端に位置し、調査では南東部を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われ、東壁の規模を６ｍ前後と推定する。主柱穴は東壁に沿って直径80～90cmのものが２個確認され、未調査区のものと合わせ４個方形配列なるものと思われ、主軸方向はＮ69°Ｗになる。炉は住居址中央より北側に設置された地床炉である。東西30cm・南北40cmの規模で、底面は焼き締まり深さ５cm程の鍋底状になる。入口方向の炉縁に２個の河原石を並べ枕石とする。壁下には周溝状溝が巡る。また、東壁より室内に向け間仕切り用と思われる小溝が延びている。床面は東に傾斜を有するが堅緻で平坦である。

遺物（15・16図）　出土遺物は多く器種も多岐にわたる。器台（16・17）・高坏（18～21）・小型丸底土器（22～24）・浅鉢（25・26）・坩（27・28）・壷（29～31）・甕（32～39）・台付甕（40）の器種がある。小型の土器や坩・壷等にはヘラミガキが多用されるのに対し、甕類においてはハケナデ調整を基本とする。28の坩は内湾気味に外開する口縁部、扁平球形胴の体部、小さな平底を呈する特色ある器形である。外面及び口縁部内面は丁寧なヘラミガキ調整である。29の壷の口縁部は粘土帯の貼り付けにより有段を呈する。31は体部下半から底部に至る部位の破片と思われる。甕類は体部の器形において長胴形（32～34）のものと球形胴（35～38・40）のものに大別される。32の甕は器形・文様共に弥生時代後期の箱清水式期の系譜を引いており、頸部に不規則連続止め12本歯櫛描き廉状文が巡り、肩部から体部にかけて３帯の波状文が描かれる。文様帯以外はヘラミガキが施される。33の口唇部は面取りが施される。

Ｃ５号住居址（ＣＳＡ５）

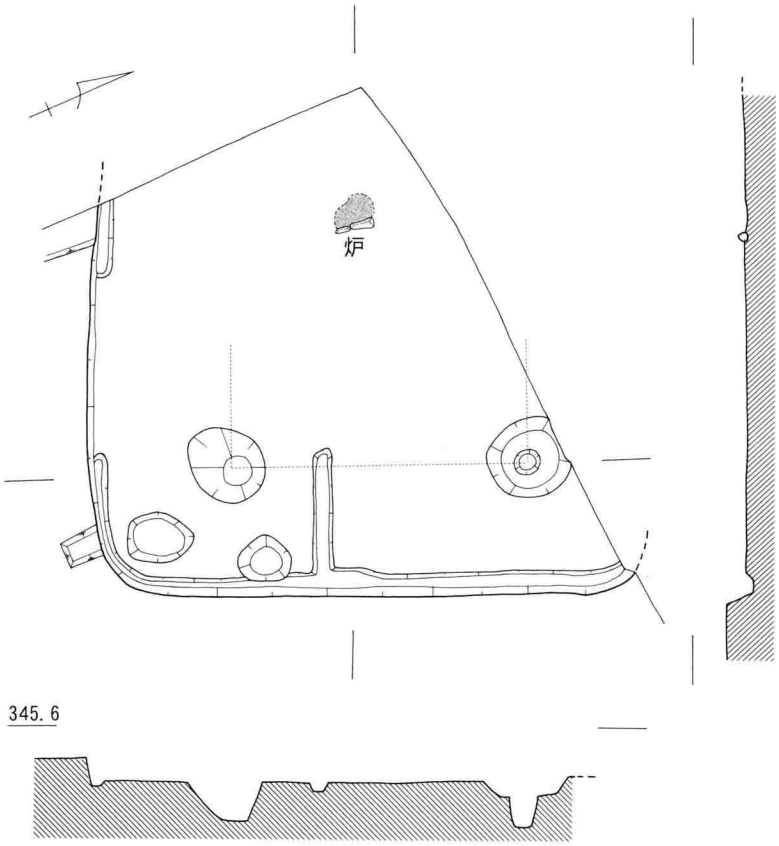
遺構（12図）　Ｃ調査区の中央に位置し、平安時代の３号住居址と重複関係にある。調査では南東部３分の１程検出した。形態は隅円方形を呈するものと思われ、南北4.7ｍ程の規模である。検出面からの掘り込みは深く70cmを測る。床面は平坦で軟弱である。主柱穴は南西隅に１個確認されるものの北西隅にはみられない。炉は未調査域にあるものと思われる。南壁の方向はＮ55°Ｗを指す。

遺物（14図）　器種には高坏（１・２）・浅鉢（３）・鉢（４・５）・壷（６・７）・甕（８～10）・台付甕（11～13）等がある。１の高坏坏部は皿形を呈し、直径33.6cmを測る大型の製品である。外面の調整はハケナデのちヘラミガキが施される。２は脚部で、裾部は大きく外開し、筒部に円孔が穿たれる。６の壷の口縁部は逆ハの字形を呈し有段になる。ヘラミガキ調整を基本とするが、体部内面はハケナデである。７の体部は球形で、下半部は痩ける形態である。10は長胴で下膨れの形態になる。共に内外面はハケナデ調整が多用される。台付甕は大小２形態あり、大型のもの（11）の口縁部は有段状を呈するのに対し、小型のもの（12・13）は内湾気味に立ち上がる。高台も２形態あり、12は外反するに対して、14・15は内湾する。

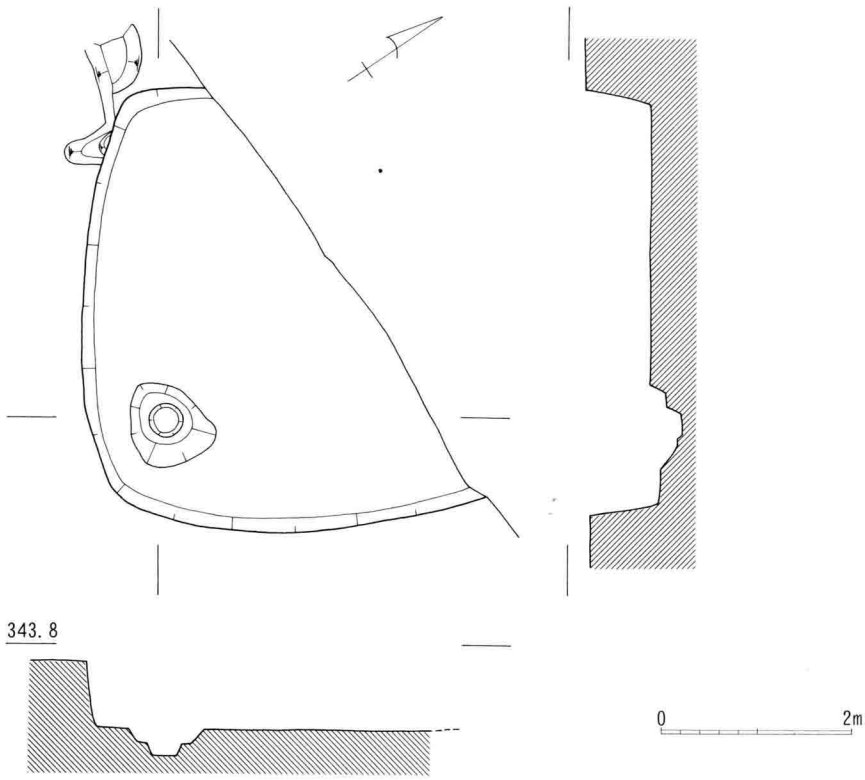
Ｃ６号住居址（ＣＳＡ６）

遺構（13図）　調査区の東端に位置し、調査では北壁と西壁の一部分を露呈したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。炉は北に偏して設けられており、周囲には炭化物が散布していた。床面は平坦で軟弱である。柱穴は確認できなかった。

遺物（16図）　出土量は少なく、器形が復元できるものは甕（42）の１個体にすぎない。口縁部は頸部からくの字形に外開し、先端部はさらに外反する器形である。体部外面の調整はハケナデとヘラケズリによっている。

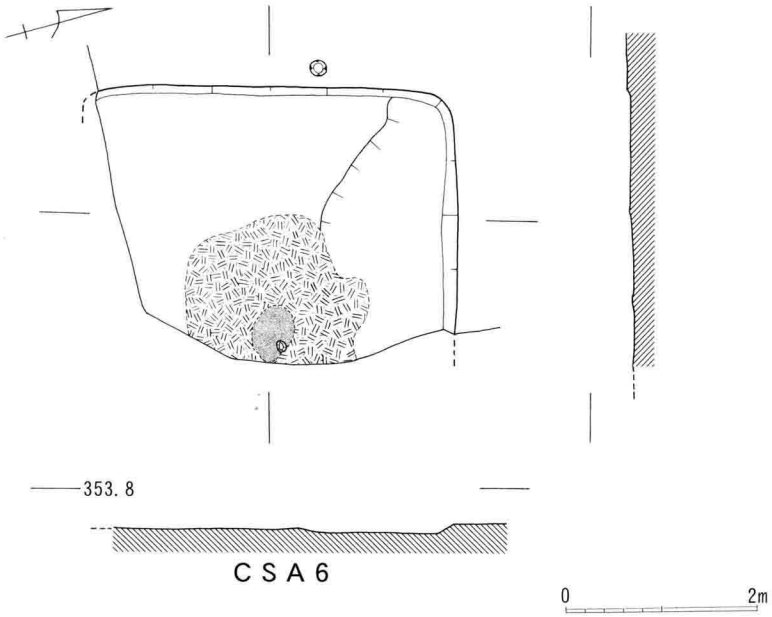


CSA4



CSA5

12図　古墳時代前期住居址実測図（1：80）



13図　古墳時代前期住居址

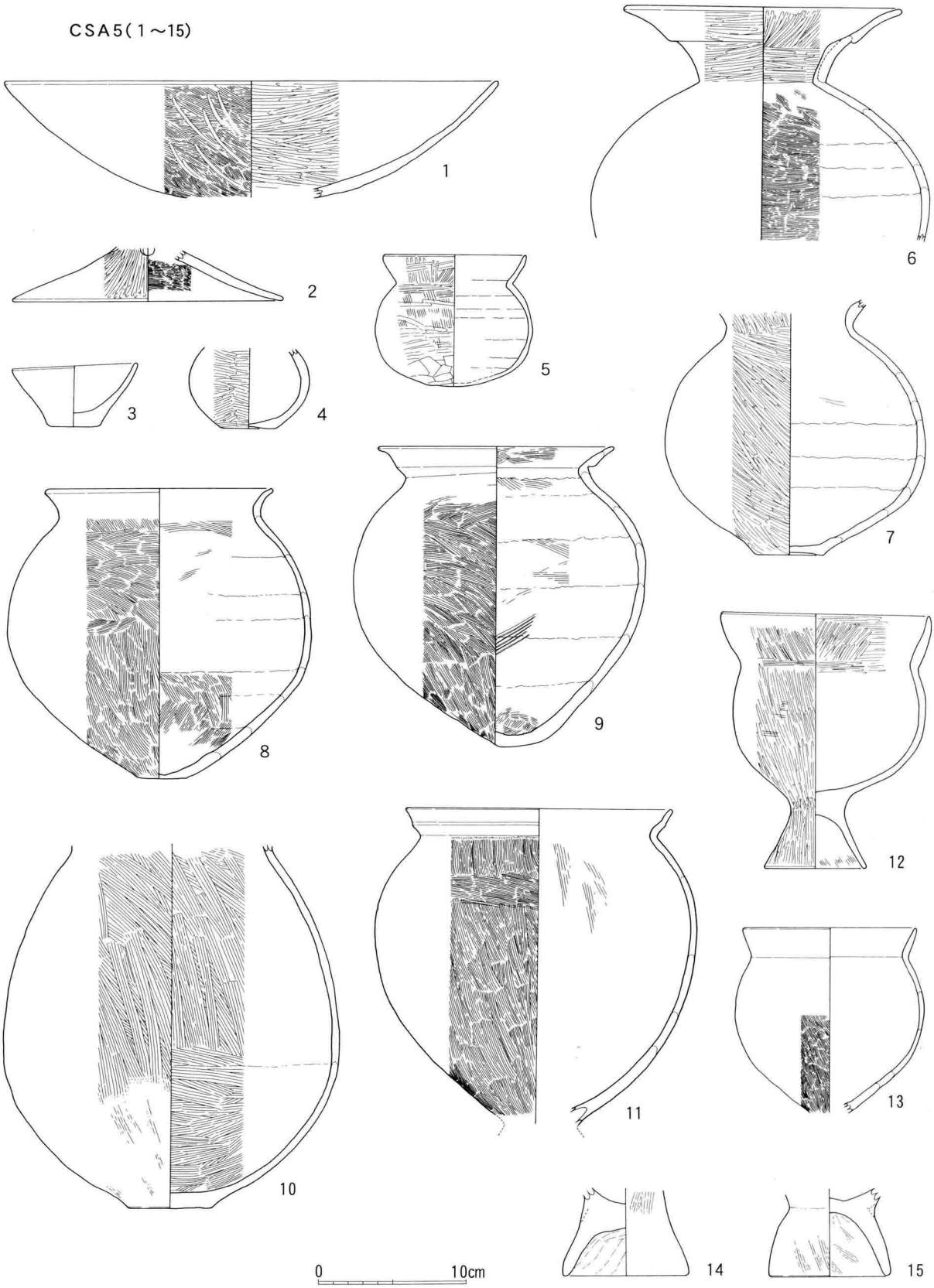
Ｆ４号住居址（ＦＳＡ４）—土地区画整理事業地—

遺構（11図）　調査区の中央に位置し、平安時代の２号・３号・６号住居址と重複関係にある。南東部を残し遺構のほぼ３分の２を調査した。形態は方形を呈し、N48°W方向に主軸がある。規模は主軸4.6m・東西軸５m前後・検出面からの深さ35cmを測る。主柱穴は３個確認され、４個長方形配列になるものと思われる。炉は枕石を伴うもので北壁側の柱穴間中央に設けられており、浅い小穴状をなしていた。周辺には焼土・炭化物が散布しており、主柱穴間中央付近にも焼土の点在が認められた。一時的な地床炉と考えられる。床面は中央部がやや高くなり、堅緻な貼り床になる。周溝は不連続なものが各壁下に掘り込まれている。入口部の南壁下に長方形を呈する土坑状の掘り込みがある。床面から30cm程の深さのもので、性格は不明である。

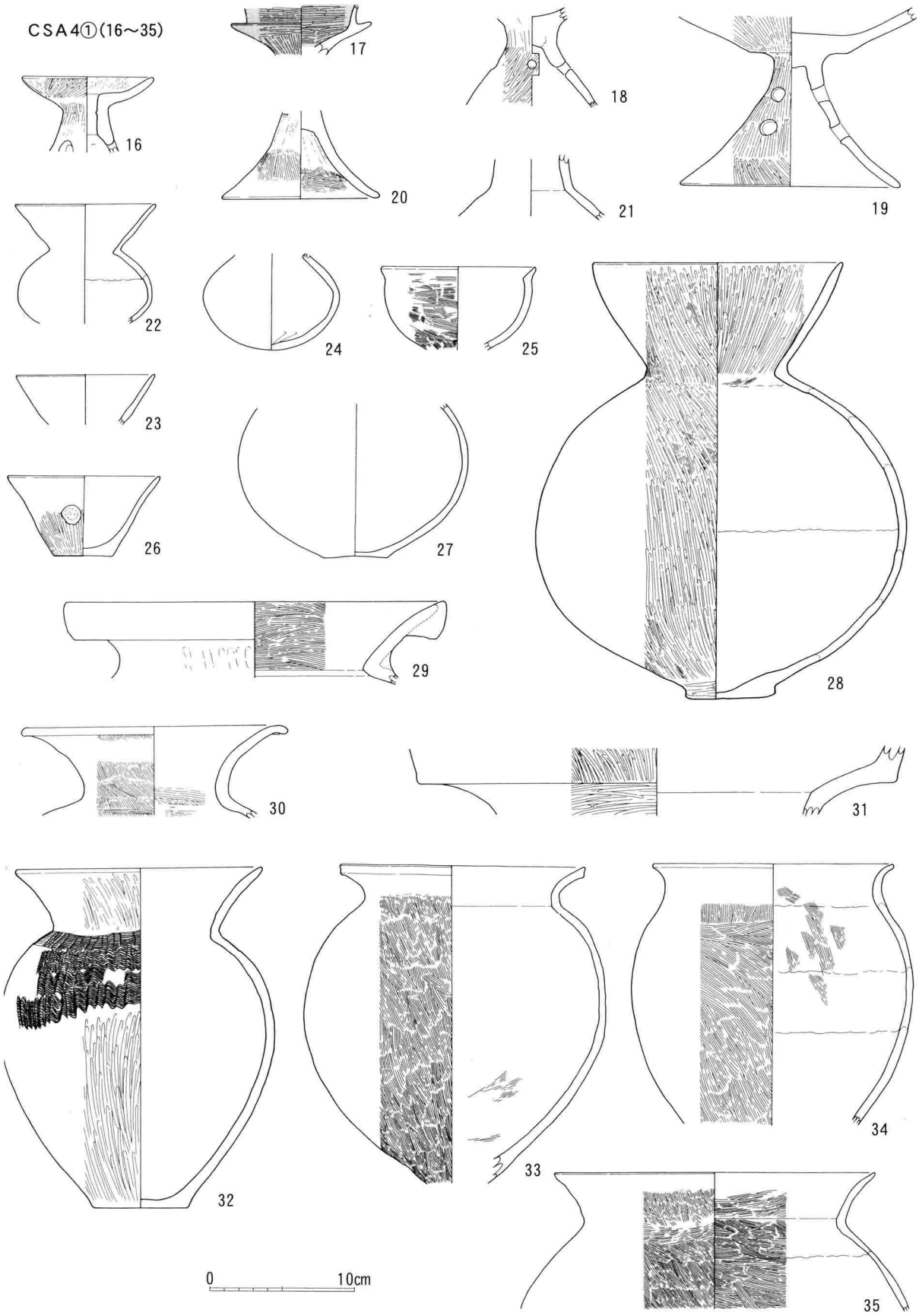
遺物　遺物の出土量は少ない。器種には鉢・甑・壷・甕・台付甕等があるが、この遺構からは祭祀形態土器の出土は認められない。

遺物観察表

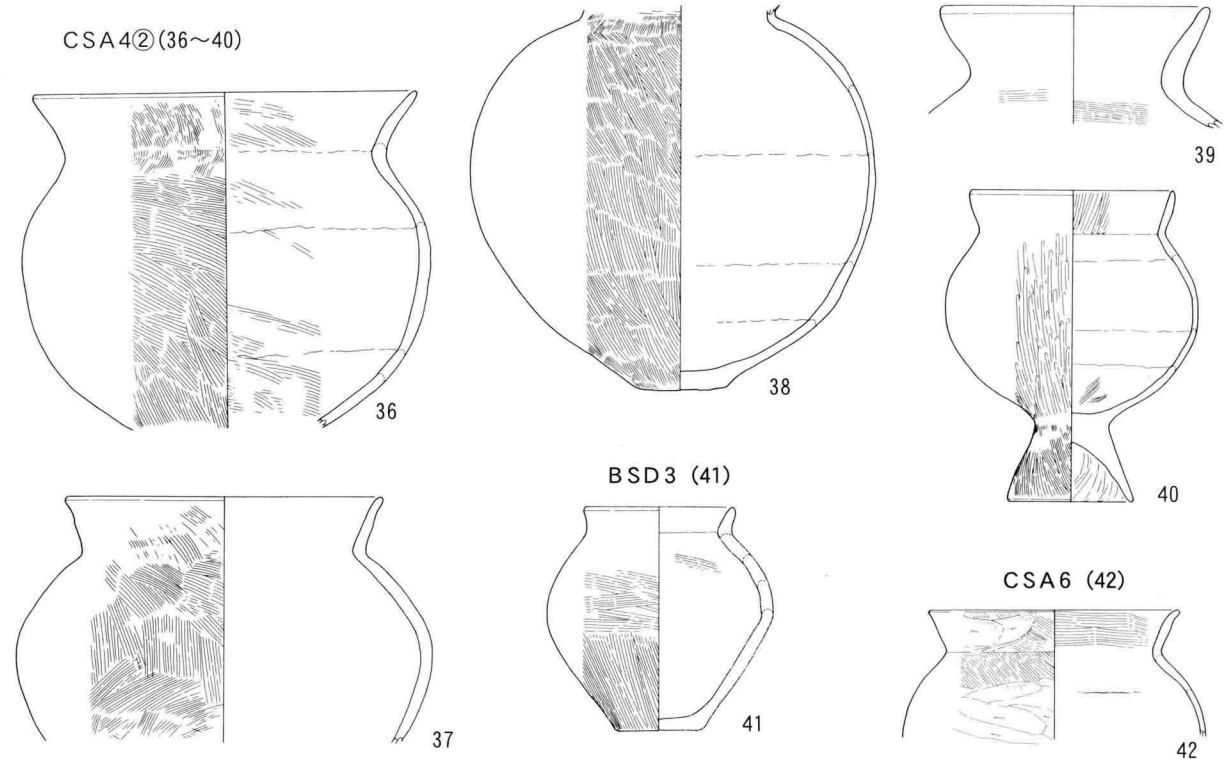
番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備考
			口径	底径	器高			
ＢＳＤ３（16図）								
41	土師	甕	7.7	4.5	10.9	1/3	外：ハケナデ、内：ハケナデ→ナデ、底ヘラケズリ	
ＣＳＡ４（15・16図）								
16	土師	器台	9.0			3/4	内外：ヘラミガキ、脚内：ヘラケズリ、三円孔	
17	〃	〃				ママ	〃：　〃　・赤彩	床
18	〃	〃				2/5	〃：　〃　、脚内：ナデ、４円孔	
19	〃	高坏		14.9		ママ	〃：　〃　、〃：ヘラケズリ→ナデ、２段３円孔	床
20	〃	〃		10.8		〃	外：ハケナデ→ヘラナデ、脚内：ハケナデ・ナデ	〃
21	〃	〃				1/7	内外磨耗	
22	〃	小型丸底	9.8			1/2	内外：ヘラミガキ、体内：ナデ・成形痕	
23	〃	〃	9.8			1/8	内外磨耗	
24	〃	〃				3/4	〃、内：ナデ	
25	〃	浅鉢	10.8			2/5	外：ハケナデ、内：ナデ	
26	〃	〃	10.6	4.1	5.7	1/3	内外：ヘラミガキ、体部穿孔痕	
27	〃	坩		4.5		3/4	外：ヘラミガキ、内：ナデ	
28	〃	〃	17.2	6.3		4/5	〃：ハケナデ→ヘラミガキ、内：ヘラミガキ・体部剥離	床



14図　古墳時代前期土器実測図（1：4）



15図　古墳時代前期土器実測図（1：4）



16図　古墳時代前期土器実測図（1：4）

遺物観察表

番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備考
			口径	底径	器高			
29	土師	壷	26.4			1/8	外：ナデ、内：ハケナデ、有段口縁	
30	〃	〃	18.2			2/3	内外：ハケナデ・ナデ	床
31	〃	〃				1/3	外：ヘラミガキ、体内：剥離、体部下半	弥生系？
32	〃	甕	17.0	6.6	23.7	4/5	外：不規則連続止廉状文・3段波状文・ヘラミガキ、内：アレ	弥生系・床
33	〃	〃	15.0			2/3	〃：ハケナデ、内：ハケナデ→ナデ、口唇：面取り	北陸系・〃
34	〃	〃	16.6			1/2	〃：　〃　、内：　〃	
35	〃	〃	22.2			ママ	内外：ハケナデ	
36	〃	〃	20.4			1/2	外：ハケナデ、内：ハケナデ→ナデ、体内成形痕	
37	〃	〃	16.8			3/5	〃：　〃　、〃：ナデ	床
38	〃	〃		3.8		4/5	〃：　〃　、〃：〃、壷形	〃
39	〃	〃	14.1			ママ	〃：　〃　・ナデ、内：ハケナデ・ナデ、壷形	〃
40	〃	台付甕	10.8	6.6	16.6	1/2	〃：ヘラミガキ、内：ヘラミガキ・ハケナデ、脚：ハケナデ	
CSA5（14図）								
1	土師	高坏	33.6			1/7	外：ハケナデ・ヘラミガキ、内：ヘラミガキ	床
2	〃	〃		18.4		3/5	〃：ヘラミガキ、内：ハケナデ・ナデ、4内孔	
3	〃	浅鉢	8.6	3.6	4.5	4/5	内外：ヘラナデ・ナデ	床
4	〃	鉢		3.5		ママ	外：ヘラミガキ、内：ナデ、底：ヘラケズリ	〃
5	〃	〃	9.8	2.8	9.6	1/2	外：ハケナデ→ヘラミガキ、内：ナデ・成形痕、底：ヘラケズリ	〃
6	〃	壷	18.8			3/5	内外：ヘラミガキ、体内：ハケナデ、有段口縁	
7	〃	〃		4.6		3/4	外：ヘラミガキ、内：剥離、上底	
8	〃	甕	15.6	3.4	19.9	4/5	〃：ハケナデ、内：ハケナデ・成形痕	床
9	〃	〃	16.0	丸	21.7	〃	〃：　〃　、〃：　〃　・ナデ・成形痕	
10	〃	〃		5.8		ママ	内外：ハケナデ、壷形	
11	〃	台付甕	18.2			4/5	外：ハケナデ、内：ハケナデ・ナデ、擬S字状口縁	
12	〃	〃	14.5	7.0	17.4	5/6	内外：ヘラミガキ、体内磨耗、脚内：ハケナデ・ナデ	
13	〃	〃	11.8			1/2	外：ハケナデ・ナデ、体内磨耗	床
14	〃	〃		6.3		ママ	〃：　〃　・ヘラケズリ、内：ナデ	
15	〃	〃		8.0		〃	〃：　〃　、内：ハケナデ・ナデ	
CSA6（16図）								
42	土師	甕	13.2			1/6	外：ハケナデ→ヘラケズリ、内：ハケナデ・ナデ	

(2) 古墳時代後期・奈良時代の遺構と遺物

Ａ調査区の溝址（９図）

Ａ調査区においては８条の溝址が検出されている。この内遺物が出土した遺構は２号・６号・７号溝址がある。出土遺物から２号・６号を奈良時代、７号を古墳時代後期末葉から奈良時代とそれぞれの年代を比定する。５号・８号溝址も６号溝址と接合し終結していることから６号溝址と共に機能していたものと考えられる。また、６号・７号溝址と併走関係にある３号・４号も奈良時代に掘り込まれた遺構と思われる。

Ａ２号溝址（ＡＳＤ２）

遺構（９図）　５・６号溝址の東側に位置し、調査地内を緩い弧状に展開する。幅20cm・深さ15cm前後の遺構である。底面は平坦で傾斜を有しない。

遺物（18図）　土師器坏（44）、須恵器坏（45）・鉢（46）・高台坏（47・48）等の器種がある。土師器坏は内外面ともヘラミガキ調整である。須恵器はロクロによって仕上げられるが、47の内面には粘土紐成形痕が残る。台付坏の底部外面は高台より丸味をもって張り出し、右回転ヘラケズリという特色を有する。

Ａ６号溝址（ＡＳＤ６）

遺構（17図）　７号溝址に隣接し、ほぼＮ55°Ｅ方向に併走関係にある。規模は北側の幅が大きく約2.7ｍ・南側で0.9ｍと一様ではない。検出面からの深さは北で25cm・南で40cmを測るが、底面は一定しない。

遺物（18図）　出土量は少ないが、須恵器坏（49）・コップ状高台坏（50）・高台盤（51）、土師器（52）甕等が出土している。

Ａ７号溝址（ＡＳＤ７）

遺構（17図）　調査地の北半分ほどはＵ字形の溝形態にあるのに対し、南側は幅の広い窪地様の溝になる。北側幅２ｍ前後・検出面からの深さ42cm、南側幅3.7～4.2ｍ・深さ40cmを測るが、底面の傾斜は６号溝址と逆に南から北方向になる。底面には土器類の他に河原石の転石が認められ、流路として機能していた可能性が高い。

遺物（18図）　今回調査した中で比較的多くの遺物を得た遺構である。器種には土師器坏（53・54）・高坏（59・61）・鉢（65）、黒色土器坏（54・56～58）・高坏（60・62～64）、須恵器蓋（66～71）・坏（72）・台付坏（73）・提瓶（74・75）・高坏（76）・台付壷（77）等がある。土師器・黒色土器の調整はヘラミガキを基調としている。坏は底部が丸味を帯びるものが古相で、平底のものが新相である。須恵器蓋は口縁部がかえりの有るもの(66・67・70・71)と嘴状のもの（68）がある。前者のタイプの方が古相である。73の坏底部には奈良時代特有のヘラオコシ技法による非回転ヘラケズリ痕がみられる。

Ａ１号・２号・３号土坑

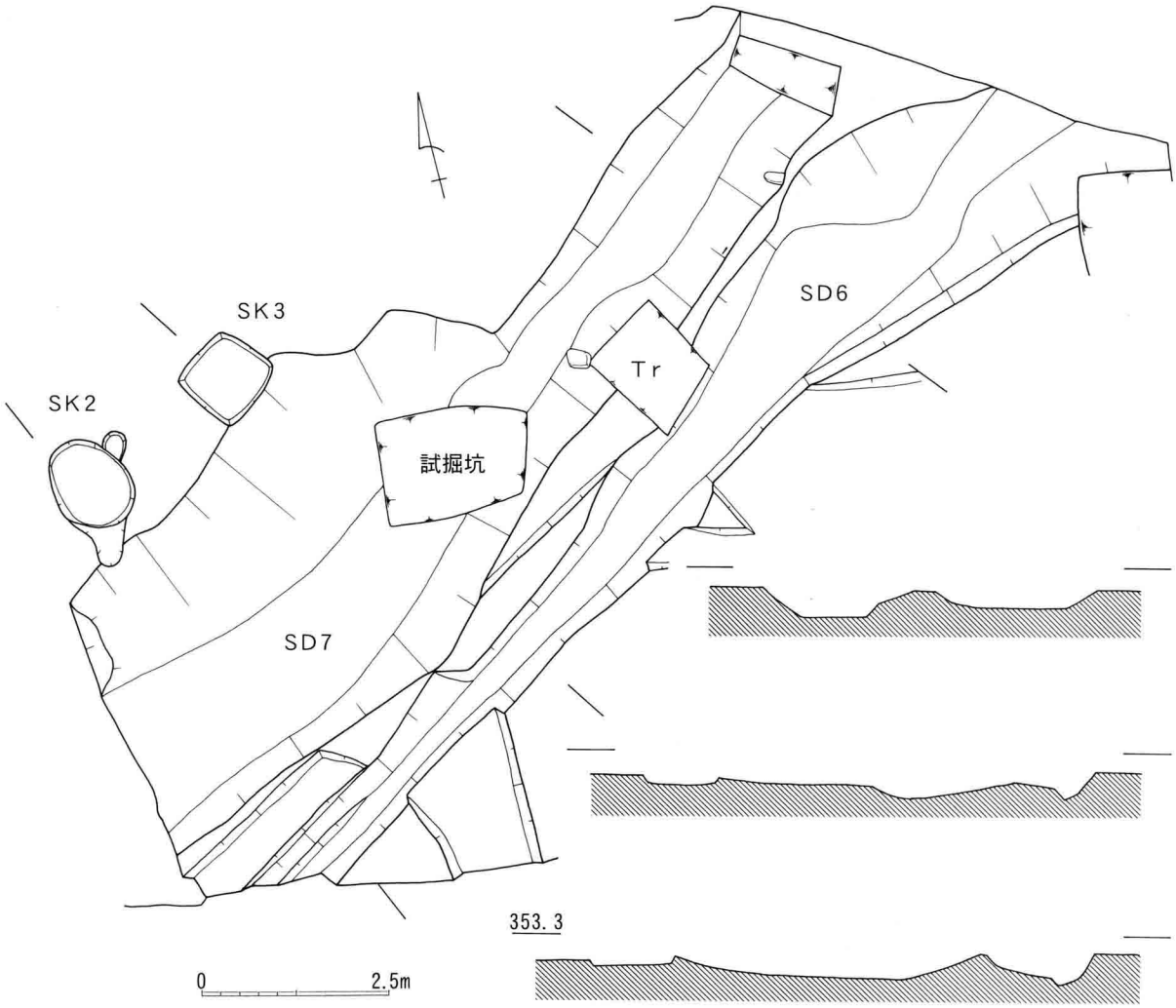
７号溝址の北に位置する土坑群で、覆土は溝址と同様の炭化物を含む黒褐色砂質土であり、１号土坑から奈良時代に比定される須恵器坏の出土をみたことから当該期と考えた。

遺構	１号土坑（ＡＳＫ１、17図）	円形	直径1.15ｍ・深さ42cm	平底
	２号土坑（ＡＳＫ２、17図）	方形	一辺1,05ｍ・深さ９cm	平底
	３号土坑（ＡＳＫ３，17図）	卵形	長軸1.3ｍ・短軸1.1ｍ・深さ８cm	平底

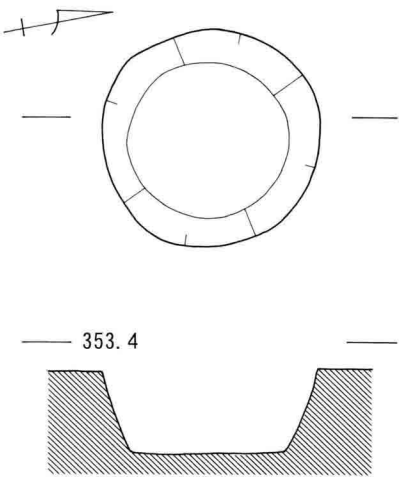
遺物（18図）　１号土坑から須恵器坏（43）が１個体出土している。体部から口縁部は直線的に外開すし、器壁の厚さを斬減ずる。器体はロクロ調整であるが、ロクロからの切り離しをヘラによる所謂ヘラオコシ技法によっている。

その他の遺物

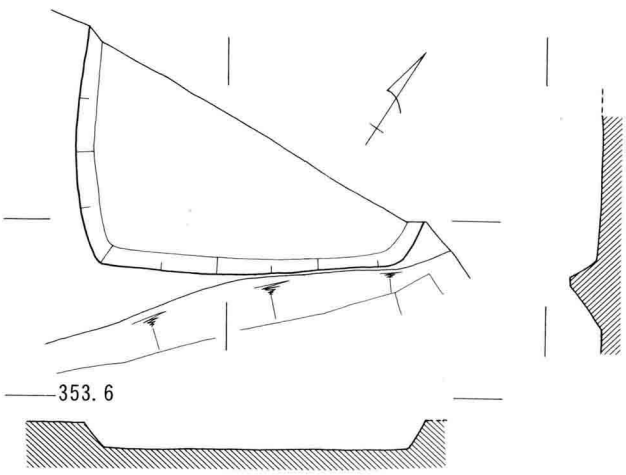
Ｄ１号土坑（ＤＳＫ１）から丸底の須恵器高台坏（18図78）、Ｃ区検出面から須恵器平瓶（79）が出土しており、共に奈良時代に比定される。



ASD6･7、ASK2･3(1:100)



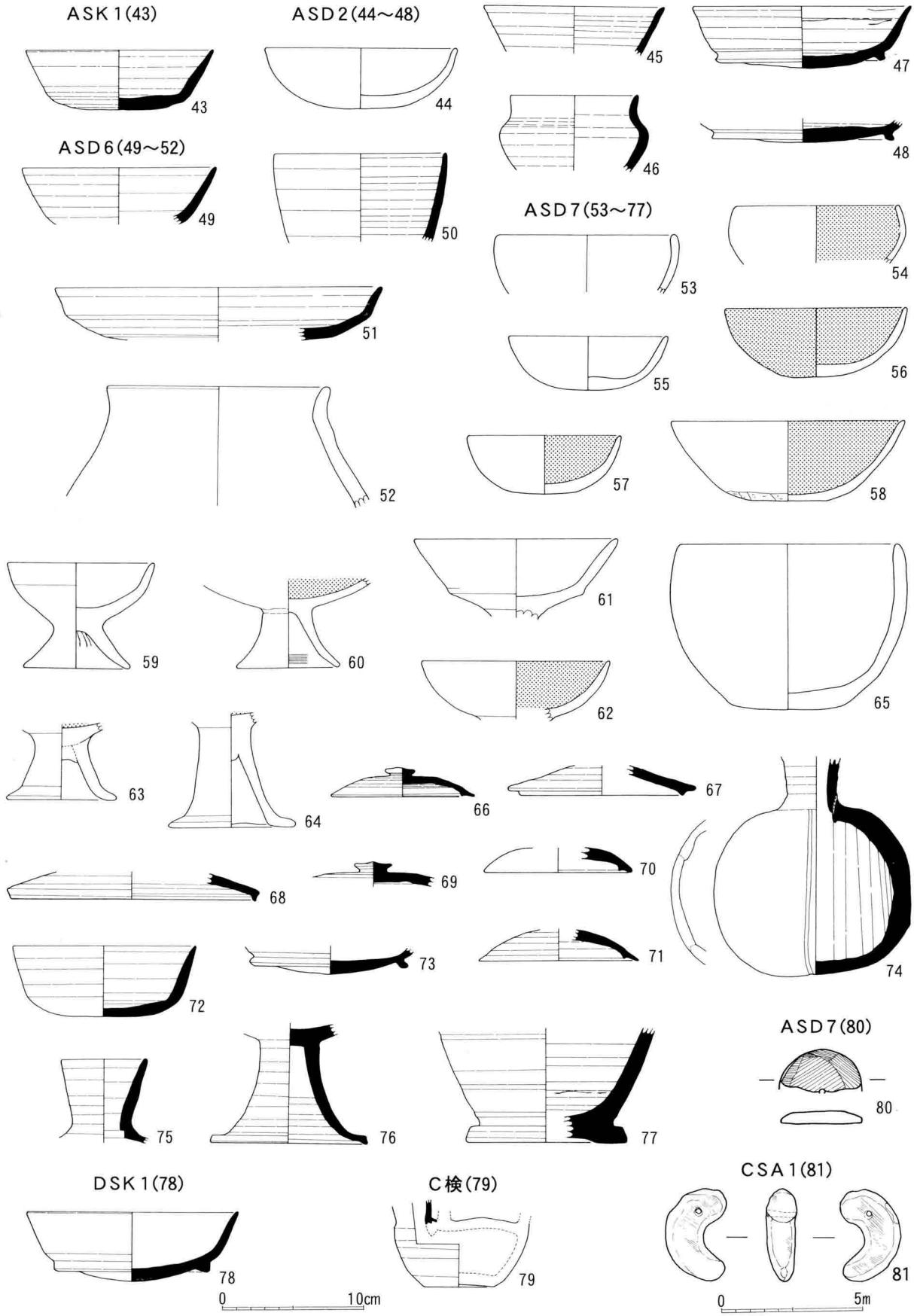
ASA1(1:40)



ASA2(1:80)

0　1m　　0　2m

17図　古墳時代後期末～奈良時代、平安時代（ＡＳＡ２）遺構実測図



18図　古墳時代後期末～奈良時代土器（1：4）滑石製品（1：2）実測図

遺物観察表

番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備考
			口径	底径	器高			
ＡＳＫ１（18図）								
43	須恵	坏	13.3	9.5	4.3	1/2	ロクロ，底：非回転ヘラケズリ→ナデ・丸味	
ＡＳＤ２（18図）								
44	土師	坏	13.5	丸	4.2	1/2	内外：ヘラミガキ	
45	須恵	〃	12.7			1/8	ロクロ	
46	〃	鉢	8.9			〃	〃	
47	〃	高台坏	15.3	4.3	11.9	完形	〃、底：右回転ヘラケズリ・張り出し、酸化炎	
48	〃	〃			12.8	ママ	〃、〃：〃・〃	
ＡＳＤ６（18図）								
49	須恵	坏	13.8			1/4	ロクロ、胎土良選	
50	〃	高台坏	12.1			〃	〃、内：ヘラ状項のロクロ目、コップ状	
51	〃	高台盤	23.0			〃	〃、底：回転ヘラケズリ	
52	土師	甕	15.6			1/6	内外：ヘラナデ・ナデ、短頸	
ＡＳＤ７（18図）								
53	土師	坏	12.6			1/4	内外：ヘラミガキ、赤色塗彩？	
54	黒色	〃	11.4			1/8	〃：〃、内黒	
55	土師	〃	10.2	丸	3.8	1/4	外：ヘラケズリ→ヘラミガキ、内：ヘラミガキ	
56	黒色	〃	12.8	4.5	4.9	完形	内外：ヘラミガキ・黒色、底：「＋」のヘラ先刻印	
57	〃	〃	10.6	丸	4.9	1/2	〃：〃、内黒	
58	〃	〃	16.4	5.6	5.5	1/4	外：ロクロ、内：ヘラミガキ・黒、底：ヘラケズリ→ナデ	
59	土師	高坏	10.4	7.4	7.6	2/3	内外：ヘラミガキ、脚内：ヘラナデ、内黒	
60	黒色	〃			7.2	1/2	〃：〃、〃：〃、〃	
61	土師	〃	14.3			2/3	〃：〃	
62	黒色	〃	13.3			1/2	外：ヘラケズリ→ヘラミガキ、内：ヘラミガキ・黒	
63	〃	〃		8.0		〃	器面磨耗、内：ヘラミガキ・内黒	
64	〃	〃		9.0		ママ	内外：ヘラミガキ、脚内：ヘラケズリ、内黒	
65	土師	鉢	15.5	8.0	11.7	完形	外：ヘラナデ、内：ハケナデ→ヘラナデ、底：ヘラナデ	
66	須恵	蓋	10.1	2.1	－	1/4	ロクロ、天井：ヘラケズリ→ナデ、口縁：かえり	
67	〃	〃	12.3			1/8	〃、〃：〃、口縁：かえり	
68	〃	〃	17.4			〃	〃、口縁：嘴状	
69	〃	〃				ママ	〃、天井：右回転ヘラケズリ	
70	〃	〃	10.2			1/4	〃、〃：〃、口縁：かえり	
71	〃	〃	11.2			1/3	〃、〃：〃、〃：〃	
72	〃	坏	13.0	5.2	5.0	完形	〃、底：非回転ヘラケズリ・「/」刻印	
73	〃	高台坏		10.7		ママ	〃、〃：回転ヘラケズリ・張り出し・「×」刻印	
74	〃	提瓶				〃	〃、体部貼り付け接合	
75	〃	〃	6.1			〃	〃	
76	〃	高坏		11.1		〃	〃、脚内：ヘラナデ・ナデ	
77	〃	高台壷		11.2		1/3	〃、底：ヘラケズリ→ナデ、内：成形痕	

遺物観察表

番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備考
			口径	底径	器高			
C検出面（18図）								
79	須恵	平瓶		5.0		2/3	ロクロ	
ＤＳＫ１（18図）								
78	須恵	高台坏	14.9	10.6	4.9	1/4	ロクロ、底：右回転ヘラケズリ・張り出し	

(3) 平安時代の遺構と遺物

Ａ１号住居址（ＡＳＡ１）

遺構（19図）　調査区の西端に位置し、調査では遺構の東側半分程を露呈した。検出面は赤褐色粘質土で、黒褐色砂質土が覆土になる。溝址と覆土の色調は同系色であるが炭化物の混入は認められない。形態は方形を呈するものと思われ、南北（主軸）4.0m・検出面からの深さ18cmを測る。主軸方向はＮ９°Ｅを指す。カマドは北壁中央右寄りに構築されていたと思われ、柱穴状の掘り込みに焼土が残存していた。床面は南に傾斜するが堅緻なものである。遺構内に小穴が点在するが主柱穴配列になるものはない。

遺物（20図）　出土量は少なく、器種には土師器坏（82）・甕（87～89）、黒色土器坏（83・84）・椀（86）、須恵器坏（85）等がある。共にロクロ調整で、82～86の坏類の内面はヘラミガキが施される。底部のロクロからの切り離しは回転糸切りである。

Ａ２号住居址（ＡＳＡ２）

遺構（17図）　調査区の中央北に位置し、調査では南側の一部を検出したにすぎない。形態は方形を呈し、東西間3.8m前後の規模になるものと思われる。検出面からの掘り込みは24cmを測り、平坦軟弱である。柱穴・焼土等はみとめられない。竪穴状遺構の可能性もある。

遺物　平安時代の土器片が数点出土しているが、図上復元可能なものはない。

Ｃ１号住居址（ＣＳＡ１）

遺構（19図）　調査区１次面の西端に位置し、西壁部は未調査区域にある。また、南壁の掘り込みも定かでない。形態は隅円長方形になるものと思われ、短軸（東西）の規模は４m前後になる。主軸はN98°Ｅ方向を指す。検出面から床面まで深い所で10cmを測るにすぎない。カマドは東壁中央右寄りに構築されているが、調査では焼土塊化した火床と壁外に80cm程突出する煙道を確認した。床面は主軸方向にあっては中央部が窪み、南北では北に傾斜を有する。

遺物（20図）　出土量は多くなく、器種も土師器坏（90～96）・甕（98）、黒色土器坏（97）があるにすぎない。坏類の調整はロクロによっており、内面はヘラミガキである。滑石製の勾玉が１個床面から出土したが、古墳時代後期の所産であろう。

Ｃ２号住居址（ＣＳＡ２）

遺構（19図）　２次面の遺構で、当該期の３号住居址に隣接する。調査では南側半分程を検出した。形態は方形になるものと思われるが、南東隅は変形する。東西の規模は3.05mの小型のもので、検出面からの深さ10cm程を測る。床面は平坦で軟弱であり、遺構内には小穴１個あるのみで他の施設は確認されない。西壁の方向はN35°

Wである。

遺物（20図）　出土量は少なく、器種には土師器坏（106）・須恵器坏（107）があるにすぎない。共に底部外面には糸切り痕を残す。

Ｃ３号住居址（ＣＳＡ３）

遺構（19図）　調査区中央に位置し、古墳時代前期の５号住居址と重複関係にある。調査では南側の一部を検出したにすぎない。形態は底辺の北壁の長い台形を呈するものと思われる。カマドは南壁中央に構築されており、壁外に突出する煙道と火床が残存していた。遺構の内外に土坑状の落ち込みがみられるが後世の撹乱によるものである。主軸方向はN152°Wである。

遺物（20図）　出土量は少なく、黒色土器坏（99～101）・甕（104・105）、灰釉陶器椀（102）、須恵器坏（103）等の器種がある。共にロクロによる調整で、黒色土器内面はヘラミガキが施される。須恵器の底部外面には糸切り痕を残す。

Ｃ調査区検出面の遺物（20図）

出土量は多くなく、図上復元可能なものは土師器坏（108・109）・高台皿（112）、黒色土器坏（110・111）、須恵器蓋（113）がある。

Ｆ１号住居址（ＦＳＡ１）―土地区画整理事業―

遺構（11図）　調査区の西端に位置する大型の住居址である。調査では東側の半分ほどを露呈した。東西の規模は不明であるが、南北6.7mを測る隅円方形の住居址と予想する。検出面からの掘り込みは25cmで、床面は軟弱で南・西に傾斜を有する。各壁下には周溝が巡る。カマド等の痕跡である焼土は確認されないが、北壁に沿いに炭化物の散布がみられた。主柱穴は確認されない。遺構の形態や規模から古墳時代時代前期の所産の可能性も捨てがたい。東壁の方向はN40°Wである。

遺物　遺構規模の割には出土遺物が少なく、図上復元可能な土器片は甕が１個体あるにすぎない。

Ｆ２号住居址（ＦＳＡ２）―土地区画整理事業―

遺構（11図）　調査区の中央に位置し、古墳時代前期の４号住居址・平安時代の１号土坑と重複関係にある。今回の調査で全景を露呈した唯一の住居址である。形態は方形を呈し、主軸(東西)3.5m・南北3.7m・西壁高22cmの規模である。主軸の方向はほぼ東西を指す。カマドは東壁中央右寄りに構築されているが、調査では構築石材・焼土塊化した火床及びわずかに突出する煙道を検出した。床面は東・北に傾くが堅緻である。遺物の多くはカマド周辺からの出土である。

遺物　遺物の出土は比較的多い。器種には土師器坏・甕、黒色土器坏・椀、灰釉陶器椀等がある。

Ｆ３号住居址（ＦＳＡ３）―土地区画整理事業―

遺構（11図）　当該期の２号住居址と北壁で重複関係にある。調査では北壁側一部分を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われ、東西軸はN83°W方向を指し、3,4mの規模になる。検出面から深さは８cmにすぎない。床面は平坦で軟弱である。

遺物　出土量は少なく、土師器坏・黒色土器椀の器種がある。

Ｆ５号住居址（ＦＳＡ５）―土地区画整理事業―

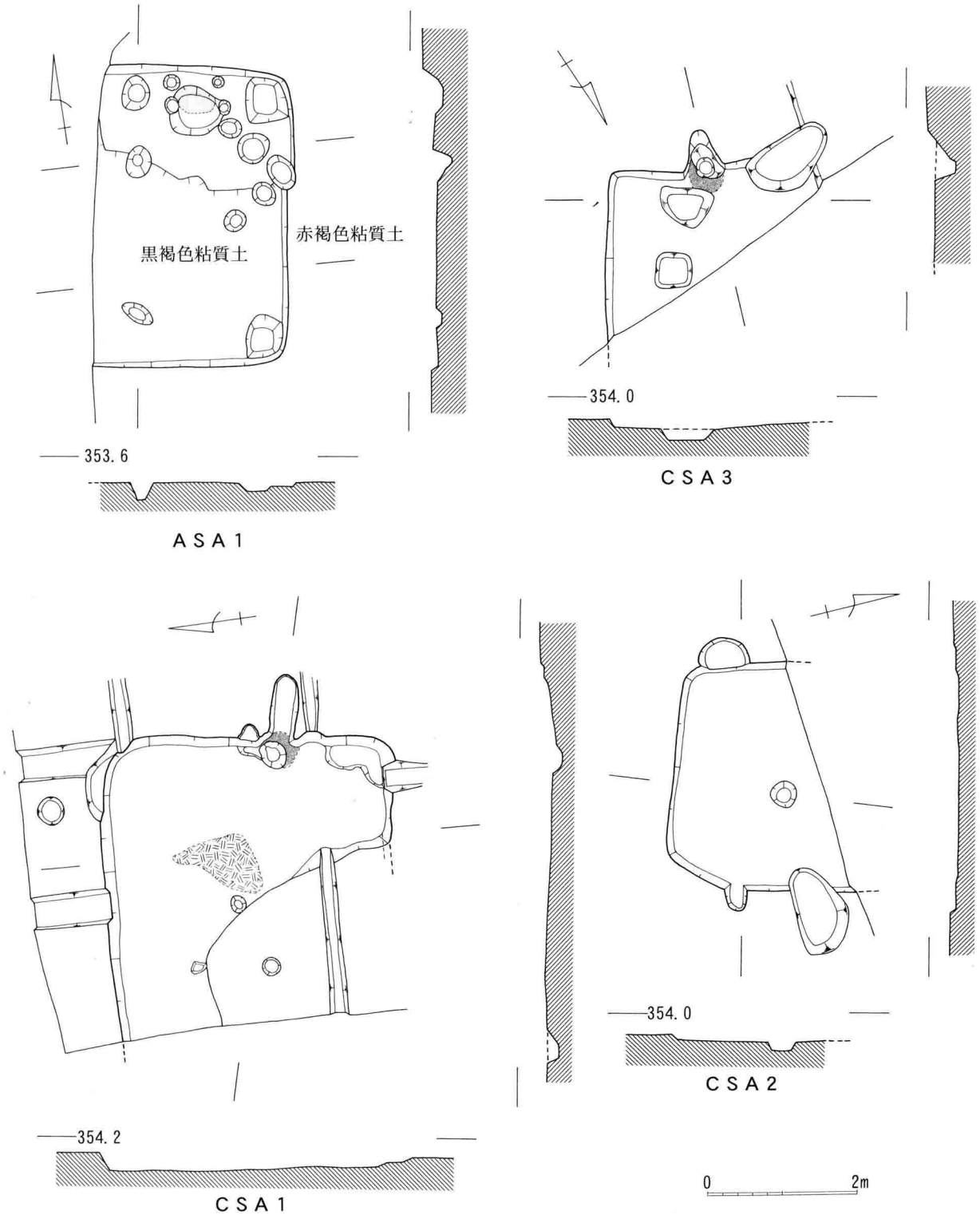
遺構（11図）　調査区の東端に位置し、調査では西側半分程を露呈した。形態は隅丸方形になるものと思われ、規模は一辺３m前後を推定する。床面は中央付近が高まりをみせ堅緻なものになる。北西隅部に数個の土坑状掘り込みがみられるが、性格は不明である。カマドの痕跡は確認されない。西壁の方向はN15°Eを指す。

遺物　出土遺物は少なく、黒色土器坏・灰釉陶器皿・土師器甕の器種がある。

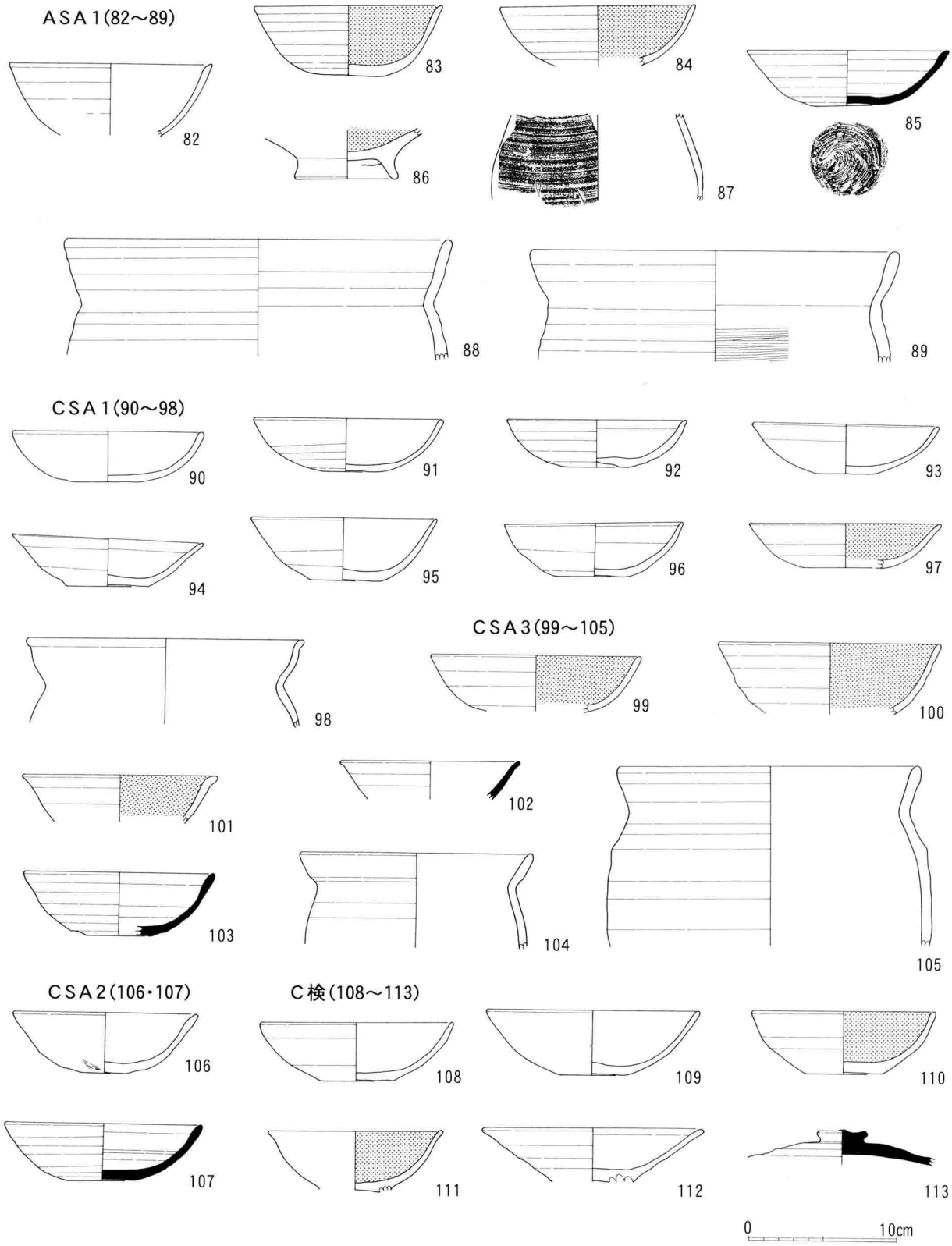
Ｆ１号土坑（ＦＳＫ１）―土地区画整理事業―

遺構（11図）　２号住居址と東側で重複関係にある。形態は長方形を呈し、東西2.8m・南北1.6m・検出面からの深さ40cmの規模である。長軸方向はほぼ東西である。底面は平坦で、中央に直径47cm・深さ８cm程の掘り込みがみられる。底面には完形の坏・椀各１個体、河原石１個が据え置かれていた。

遺物　土師器坏・黒色土器椀・灰釉陶器皿が出土している。



19図　平安時代住居址実測図（１：80）



20図　平安時代土器実測図（1：4）

⑷ 時期不明・その他の遺構

各調査区から土坑・小穴・溝址等が検出されているが、出土遺物がなく時期を判定することは困難である。また、用途や性格を推定することは更に難しい。D区・H区・E区の調査区からは出土遺物がなく、検出遺構は近世以降の畑作によるものと推定される。

遺物観察表

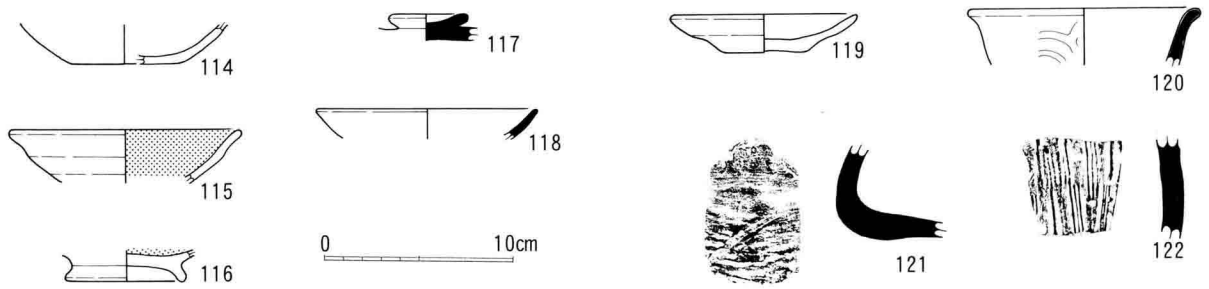
番号	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	遺存	特記事項
ASA1（20図）							
82	土師	坏	13.8			1/4	ロクロ、内：ヘラミガキ
83	黒色	〃	12.7	5.2	4.7	完形	〃 、〃： 〃・黒、糸切り
84	〃	〃	13.2			1/4	〃 、内黒
85	須恵	〃	13.9	5.0	3.8	2/3	〃 、糸切り
86	黒色	椀		6.8		ママ	〃 、内：ヘラミガキ・黒
87	土師	甕				1/8	〃
88	〃	〃	26.0			〃	〃、内：ヨコハケ・ナデ
89	〃	〃	24.7			〃	〃、〃： 〃 ・〃
CSA1（20図）							
90	土師	坏	13.0	4.7	3.4	1/8	ロクロ、糸切り
91	〃	〃	12.9	3.8	3.6	3/4	〃 、 〃
92	〃	〃	12.2	4.4	3.2	1/3	〃 、 〃
93	〃	〃	12.8	4.1	3.4	4/5	〃 、 〃
94	〃	〃	13.0	5.6	3.3	完形	〃 、 〃
95	〃	〃	12.6	2.7	4.2	〃	〃 、 〃
96	〃	〃	12.2	4.9	3.7	1/2	〃 、 〃
97	黒色	〃	13.2	5.6	3.0	1/3	〃 、 〃 、内黒
98	土師	甕	18.8			1/5	〃

番号	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	遺存	特記事項
CSA3（20図）							
99	黒色	坏	14.2			1/6	ロクロ、内：ヘラミガキ・黒
100	〃	〃	15.2			1/8	〃 、〃： 〃 ・〃
101	〃	〃	13.2			〃	〃 、〃： 〃 ・〃
102	灰釉	椀	12.2			1/10	〃 、暗緑色釉
103	須恵	坏	13.0			1/3	〃 、糸切り
104	土師	甕	15.8			1/4	〃
105	〃	〃	20.8			1/6	〃
CSA4（20図）							
106	土師	坏	12.2	4.0	4.1	1/2	ロクロ、糸切り
107	須恵	〃	13.4	4.5	3.9	3/4	〃 、 〃
C検出面（20図）							
108	土師	坏	13.0	5.0	4.0	1/3	ロクロ、糸切り
109	〃	〃	14.2	4.8	4.4	〃	〃 、 〃
110	黒色	〃	12.4	5.2	4.3	1/2	〃 、 〃、内黒
111	黒色	椀	11.8			1/3	ロクロ、内黒
112	土師	高台皿	14.6			1/5	〃
113	須恵	蓋				2/3	〃 、天井：回転ヘラケズリ

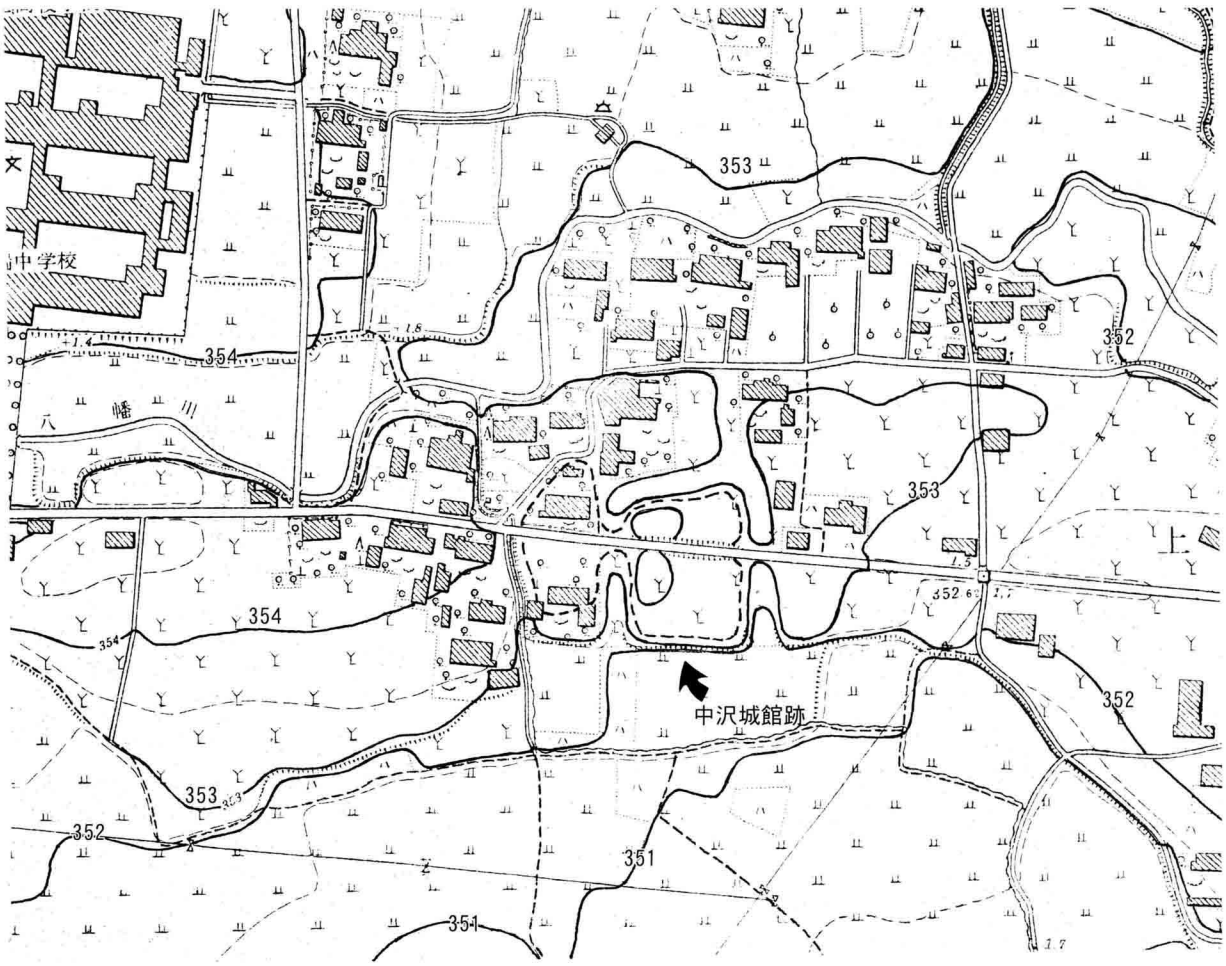
4　中沢城館跡の遺構と遺物

(1)　試掘調査と採集遺物

平成６年度の試掘調査（トレンチ調査）では、削平と撹乱が著しく面的な発掘調査を断念せざるを得なかった。そこで道路に沿って北側を重機により東西方向のトレンチ状調査を実施したところ、東側の堀跡とみられる幅３ｍ・深さ２ｍ程の掘り込みの一部を確認した。ただし、撹乱と重機での調査であったため、幅及び深さは復元推定数値であることをお断りしておく。対辺の西側の掘り込み面は検出されないが、西方約30ｍ付近に現代の廃棄



21図　中沢城跡表採土器実測図（１：４、小山丈夫氏採集）



22図　中沢城館跡及び周辺の地形図（１：3,000、大正15年測量・昭和27年修正）

物坑が穿たれており、堀跡を利用した可能性も考えられる。平成７年度に工事立会調査を、平成８年度に道路南側をトレンチ調査を実施したが遺構の存在は確認できなかった。

遺物（21図）　上記調査によって得られた出土遺物はない。小山丈夫氏により土器片が表面採集されており、平安時代では土師器坏（114）、黒色土器坏（115）・椀（116）、須恵器蓋（117）、灰釉陶器皿（118）等の器種がある。中世の遺物には土器皿（119）、龍泉窯系青磁碗（120）、珠洲焼甕（121・122）等がみられる。

(2)　地形図による城館域

大正15年測量・昭和27年修正図（22図）によれば、標高353ｍの等高線が堀跡を如実に表現している。更に微高地を示す点線よる50㎝高の標高線が館内と西側に展開している。関連の遺構の存在も考えられる。前記地図によると主要地方道栗田屋島線建設により館跡内は切り通し状態になり、堀跡は南北に分断しているがもともとは一連のものであろう。東堀は南北に貫通していたようで、等高線に閉鎖部がみられない。これに対し北堀と西堀は直角に接合して境界域を定めている。南側は352ｍの等高線が近接し、水田面より1.5ｍ以上の比高差があるためか堀跡の痕跡は認められない。そうすると堀は空堀で、深さ２ｍもあることに合点がいく。館跡の形態は東堀が長く、西堀が短い台形状を呈する。外法の規模は東堀約80ｍ・西堀約60ｍ、東西約65ｍを測る。内法は東堀約66ｍ・西堀約55ｍ、東西約50ｍの規模になる。

参考までに『長野市誌』の「古牧」の項では「明治10年代の地租改正直後の図面によると、南北108メートル、東西63メートル（空堀含む）、台地の広さ3240平方メートルである。」「築城・城主などについてははっきりしない。『諏訪御符礼之古書』の（略）南高田の代官「中沢源左衛門尉家重」と、（略）南高田郷井上氏知行の代官「中沢源左衛門国吉」は、城となんらかのかかわりあったと思われる。」と記載している。南北の規模において数値に疑問をおぼえる。

引用文献　長野市誌編さん委員会『長野市誌　第八巻　旧市町村史編　旧上水内郡旧上高井郡』平成９年　長野市

遺物観察表

番号	種別	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	遺存	成形・調整等
114	土師	坏		6.0		1/3	ロクロ、糸切り
115	黒色	〃	12.4			1/6	〃、内外黒、内：ヘラミガキ
116	〃	椀		6.4		ママ	〃、糸切り、内：ヘラミガキ・黒
117	須恵	蓋				〃	〃
118	灰釉	皿	11.7			1/8	〃、漬け掛け
119	土師	皿	10.0	4.6	2.0	1/2	ロクロ、糸切り
120	青磁	椀	12.4			1/8	龍泉窯系・陰刻
121	珠州	甕				ママ	外：タタキ目、内：ナデ
122	〃	〃				〃	〃：　〃　、〃：〃

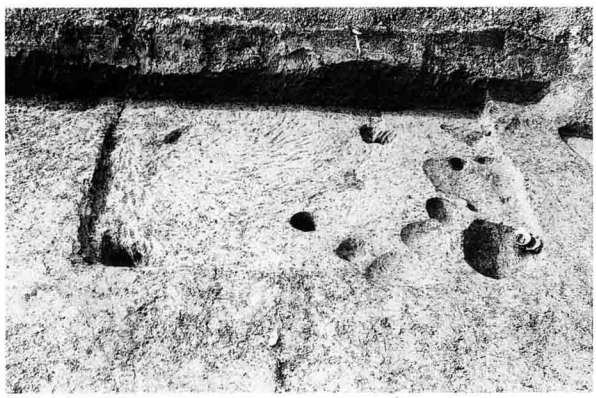
Ⅳ まとめ

発掘調査地は現道の確保や工事工程・通用口・堰・地下埋設物等の制約により線的で不連続なものである。そのため遺跡に占める調査率は高いとはいいきれない。もっとも遺跡の南限は試掘調査や本発掘の成果から旧河道の左岸河岸段丘にあることは判明したものの北限や東側の範囲は確定されない。ただし、東側は中沢城館跡からは平安時代の遺物が表面採集されていることから当該期においてはこの地域まで広がっていた可能性が高い。残念ながらA区以東は後世の撹乱が著しく調査で確認することはできなかった。北限についての可能性として、桜ヶ岡中学校建設による遺物の出土等の伝聞がないことから南八幡川をもって境と推定する。いわば遺跡の推定地は字境図（３図）によるところの西方・寺村・南向と続く扇状地内における帯状の微高地に位置するといえる。

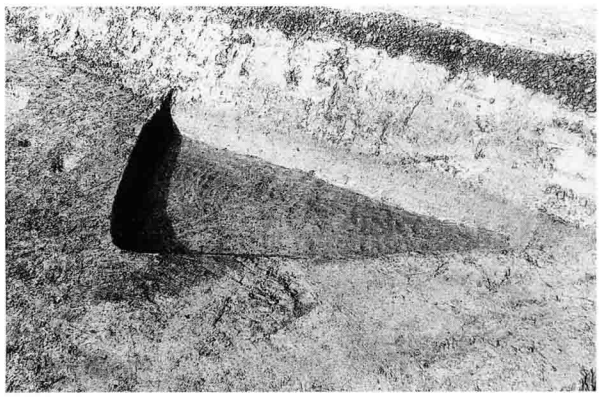
つぎに時代・時期別の遺構の分布を瞥見してみよう。この遺跡で最初に人々の生活の痕跡を見ることができるのは古墳時代前期になってからである。西端近いＦ区に住居址１軒、中央付近に位置するＣ区に３軒を検出した。Ｆ区とＣ区は直線距離にして120m程離れており、この区間内にあるＤ・Ｅ・Ｈ区において当該期の遺構・遺物が確認されていない。近時間差をもって形成された小集落または小規模集落内における二つの小単位遺構群と考えられる。４軒の住居址共に全形を露呈することはできなかったが、基本形態は方形を呈するものと思われる。比較的露呈度の高いＦ４号住居址に代表させて当該期の遺構の特色をみてみよう。規模は主軸4.6m・東西５m前後を測る小振りな遺構である。炉は地床炉で柱穴間中央に位置し、炉縁に河原石を据え置く。床面は堅緻な貼り床が施され、各壁下には周溝状小溝を巡らす。主柱穴は４個方形配列である。Ｃ４号住居址も同様施設を用いられるが、間仕切り用と思われる小溝が掘り込まれ、炉の位置が主柱穴内空間に設けられている点異なりをみせる。出土土器においては甕に廉状文・波状文が施され、弥生時代の系譜がみられる。古墳時代後期末から奈良時代の遺構にＡ７号溝址がある。また、奈良時代の遺構はＡ区で溝址・土坑が検出されているものの居住施設はみられない。ともかくＡ区近隣に小規模集落跡の存在が予想される。平安時代ではＡ区で住居址２軒、Ｃ区で３軒、Ｆ区で４軒・土坑１基を検出した。これらの遺構の展開分布をみるとＡ区周辺、Ｃ区に遺構のまとまりが認められる。すなわち西方遺跡全面に当該期の集落が形成されたのではなく、小規模単位で存立していたものと考えられる。時期はＣ３号住居址が先行するようで、坏類は須恵器と黒色土器に限られ、西方遺跡の平安時代集落は９世紀後半から形成が始まったことを暗示する。

中沢城館跡は破壊されたものと推定され、今になってはその内容を古書等に頼るほかない。本書では大正15年測量・昭和27年修正の地図を基に、形態が台形状を呈し、外法の規模を東堀約80m・西堀約60m・東西約60mと想定した。南に堀がないのは裾花川河岸段丘にあたり、天然の要害として利用したため堀の必要がなかったものと思われる。ちなみにⅢ章４節（２）記述した中沢氏が記載される『諏訪御符礼之古書』は康正２年（1456）頃の古文書である。

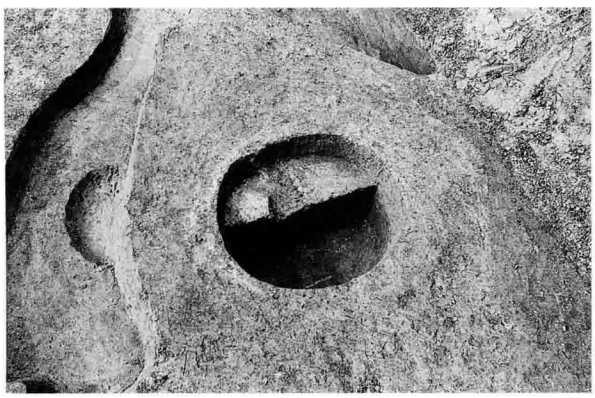
Ⅲ－１　A区全景



Ⅲ－２　ＡＳＡ１



Ⅲ－３　ＡＳＡ２



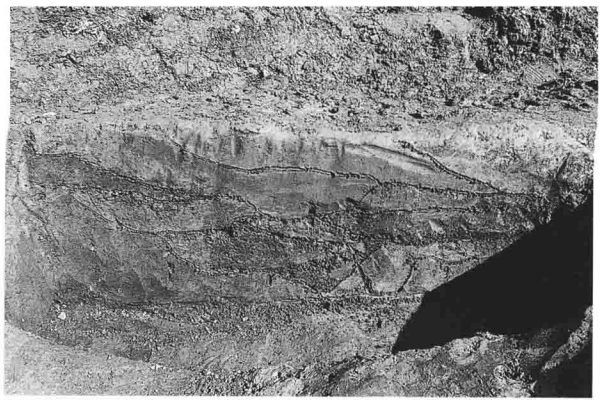
Ⅲ－４　ＡＳＫ１

Ⅲ－５　ＡＳＫ２（右）・３（左）

ＰＬ１：A区の遺構

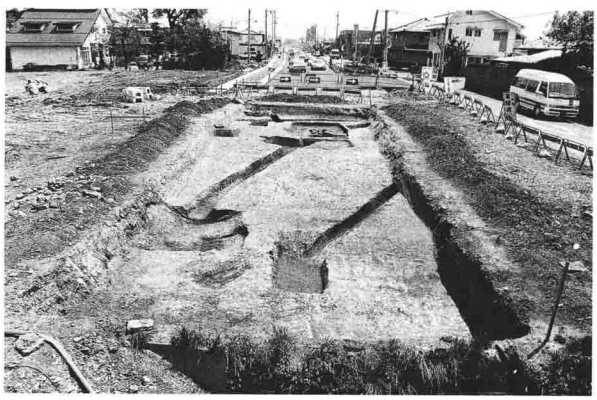
Ⅲ－6　ＡＳＤ６（左）・７（右）

Ⅲ－7　ＡＳＤ７



Ⅲ－8　ＡＳＤ６土層

Ⅲ－9　ＡＳＤ１

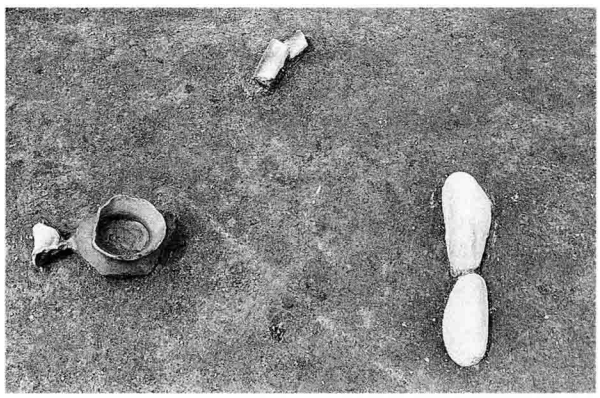


Ⅲ－10　Ｂ区全景

ＰＬ２：Ａ・Ｂ区の遺構

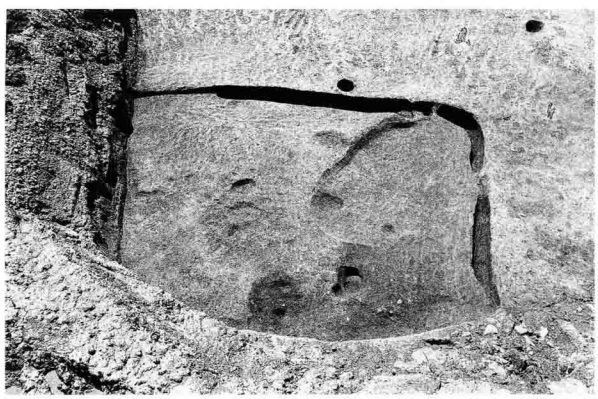
Ⅲ－11　C区全景

Ⅲ－12　ＣＳＡ４遺物出土状態



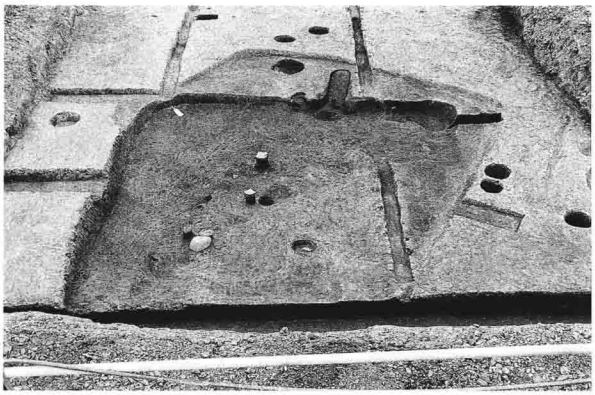
Ⅲ－13　ＣＳＡ４炉

Ⅲ－14　ＣＳＡ５

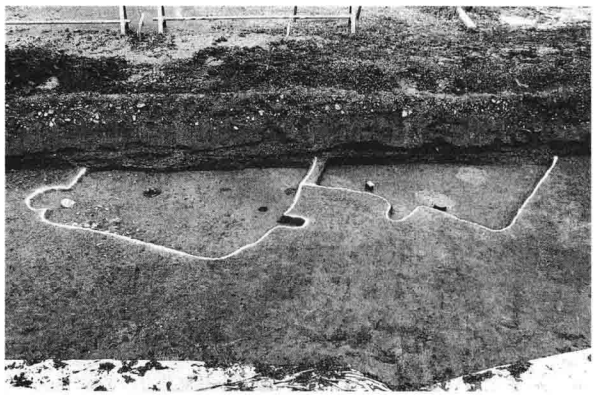


Ⅲ－15　ＣＳＡ６

ＰＬ３：C区の遺構

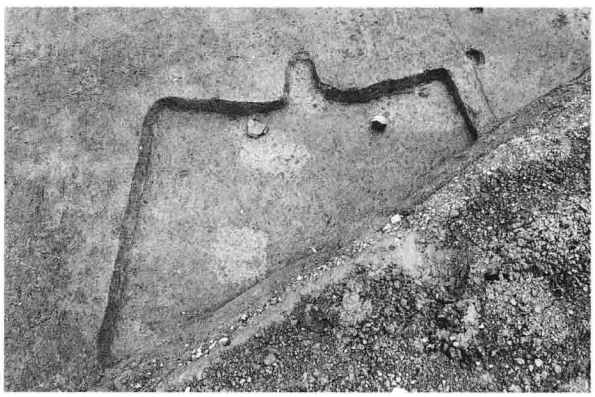


Ⅲ－16　ＣＳＡ１

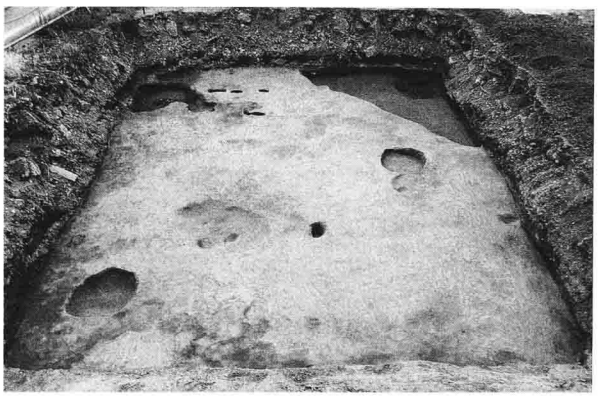


Ⅲ－17　ＣＳＡ２（左）・３（右）

Ⅲ－18　ＣＳＡ２



Ⅲ－19　ＣＳＡ３



Ⅲ－20　Ｄ区全景

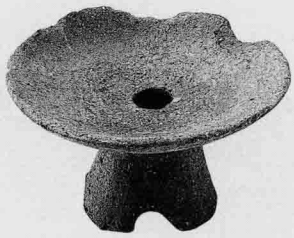
Ⅲ－21　Ｈ区全景

Ⅲ－22　平成７年度従事者

Ⅲ－23　平成８年度従事者

ＰＬ４：Ｃ・Ｄ・Ｈ区の遺構、発掘調査従事者

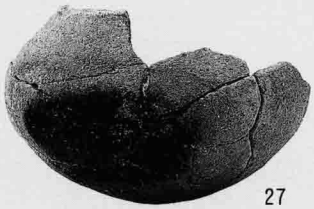
CSA4



16

19

26



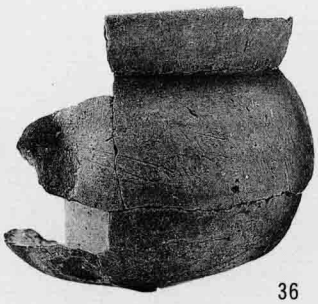
27

28

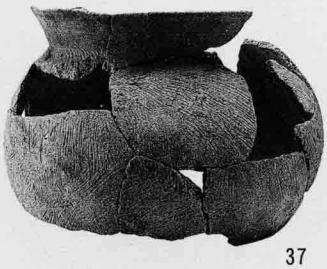
32

33

40



36



37

38

PL5：CSA1

CSA5

3

6

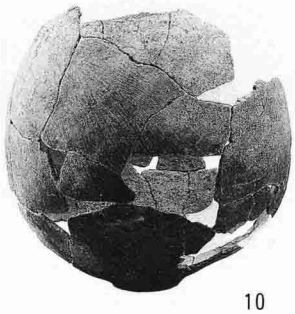
12

8

7

11

9


10

BSD3

41

ASD2

47

44

C検

ASK1

43

79

PL6：CSA5、BSD3、ASD2、ASK1、C検

ASD7

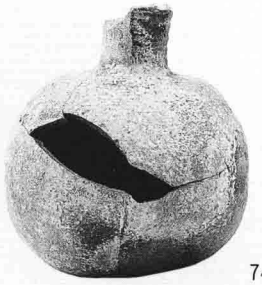
58

65

61

72

59


74

ASA1

83

85

86

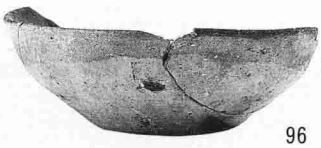
CSA1

91

93

94

95


96

CSA4

107

CSA3

103

中沢城館跡（珠洲焼）

121

PL7：ASD7、ASA1、CSA1・3・4、中沢城館跡

報告書抄録

ふりがな	すそばながわせんじょうちいせきぐん　にしがたいせき・なかざわじょうかんあと
書名	裾花川扇状地遺跡群　西方遺跡　・　中沢城館跡
副書名	―国補街路（栗田屋島線高田）事業地点―
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第91集
編集者	矢口忠良・飯島哲也・小野由美子
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	1998（平成10）年３月13日
印刷所	奥山印刷工業株式会社　（長野市大豆島本郷前5959-1　TEL 026-221-3243）

所収遺跡名	所在地	コード		経緯度（日本測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
西方遺跡（にしかたいせき）	長野県（ながのけん）長野市（ながのし）大字（おおあざ）高田字西方（たかだあざにしかた）953　他	20201	B－018	北緯 36° 38′22″ 東経138° 12′28″	19950117 ～ 19961227	2,600㎡	国補街路事業
中沢城館跡（なかざわじょうかんあと）	長野県（ながのけん）長野市（ながのし）大字（おおあざ）高田字西方（たかだあざにしかた）992　他	20201	B－206	北緯 36° 38′22″ 東経138° 12′35″	19950224 ～ 19960209	トレンチ調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西方遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡　３軒	土師器、石製品	遺跡群内の小単位集落跡
		古墳時代後期・奈良時代	溝跡　３条 土坑　３基	土師器、須恵器	居住域確定不明
		平安時代	竪穴住居跡　５軒	土師器、須恵器、灰釉陶器	扇状地内の小規模集落跡
中沢城館跡	居館跡	中世	堀跡　１条	土師器、須恵器、灰釉陶器、珠洲焼、青磁（表採品）	壊滅

長野市の埋蔵文化財　発掘調査報告書

1968年　第1集『信濃長原古墳群』
1976年　第2集『浅川西条』
1978年　第3集『中村遺跡』
　　第4集『塩崎遺跡群』
1979年　第5集『塩崎遺跡群(2)』
1980年　第6集『三輪遺跡 －付水内坐一元神社遺跡』
　　第7集『田中沖遺跡』
　　第8集『篠ノ井遺跡群』
　　第9集『四ツ屋遺跡(第1～3次)・
　　徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
1981年　第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
　　第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年　第12集『浅川扇状地遺跡群 －牟礼バイパスA・E地点』
1983年　第13集『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・
　　川田条里的遺構・石川条里的遺構』
1984年　第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
　　第15集『箱清水遺跡(2)』
1985年　第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
1986年　第17集『浅川扇状地遺跡群 －牟礼バイパスB・C・D地点』
　　第18集『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松節－小田井神社地点遺跡』
1987年　第19集『土口将軍塚古墳 －重要遺跡確認緊急調査－』
　　第20集『三輪遺跡(2)』
　　第21集『芹田小学校遺跡』
　　第22集『長野吉田高校グランド遺跡』
1988年　第23集『横田遺跡群　富士宮遺跡』
　　第24集『塩崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』
　　第25集『小島柳原遺跡群　南川向遺跡』
　　第26集『東番場遺跡』
　　第27集『小柴見城跡』
　　第28集『宮崎遺跡』
　　第29集『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』
　　第30集『地附山古墳群』
　　第31集『町川田遺跡』
1989年　第32集『中条遺跡』
　　第33集『鶴前遺跡』
　　第34集『石川条里遺跡(4)』
　　第35集『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
1990年　第36集『屋地遺跡Ⅱ』
　　第37集『篠ノ井遺跡群Ⅲ』
1991年　第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
　　第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
　　第40集『松原遺跡』
　　第41集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡・
　　浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡・檀田遺跡』
1992年　第42集『田中沖遺跡Ⅱ』
　　第43集『南宮遺跡』
　　第44集『塩崎遺跡群(7)』
　　第45集『石川条里遺跡(6)』
　　第46集『篠ノ井遺跡群(4)』
　　第47集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・
　　本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』(第1分冊)
　　第47集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・
　　本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』(第2分冊)
　　第48集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ』
1993年　第49集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』
　　第50集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』
　　第51集『松原遺跡Ⅱ』
　　第52集『田牧居帰遺跡』
　　第53集『岩崎遺跡』
　　第54集『古町遺跡流人塚』
　　第55集『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』
　　第56集『上見林遺跡』
　　第57集『石川条里遺跡(7)』
　　第58集『松原遺跡Ⅲ』
　　第59集『史跡松代藩主真田家墓所』
1994年　第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
　　第61集『栗田城跡(2)』
　　第62集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・
　　小島柳原遺跡群 上中島遺跡』
　　第63集『松原遺跡Ⅳ』
　　第64集『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』
　　第65集『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB地点遺跡(2)』
　　第66集『石川条里遺跡(8)』
1995年　第67集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
　　第68集『栗田城跡(3)』
　　第69集『浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡』
　　第70集『八幡田沖遺跡』
　　第71集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』
　　第72集『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』
　　第73集『松代城跡』
　　第74集『松代城跡Ⅱ』
1996年　第75集『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・
　　三輪遺跡(6)・霜河原遺跡』
　　第76集『浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・
　　小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ』
　　第77集『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡』
　　第78集『布施塚1号古墳・2号古墳』
1997年　第79集『柏尾南遺跡』
　　第80集『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅱ』
　　第81集『裾花川扇状地遺跡群 村南遺跡』
　　第82集『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』
　　第83集『下箕ケ谷遺跡』
　　第84集『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡』
　　第85集『上九反遺跡』
　　第86集『裾花川扇状地遺跡群 寺村遺跡』
1998年　第87集『長野遺跡群 西町遺跡』
　　第88集『小島柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅲ』
　　第89集『裾花川扇状地遺跡群 尾張城跡』
　　第90集『西前山古墳』
　　第91集『裾花川扇状地遺跡群 西方遺跡・中沢城館跡』

長野市の埋蔵文化財第91集

裾花川扇状地遺跡群
西方遺跡・中沢城館跡

平成10年3月10日　印刷
平成10年3月13日　発行

発行　長野市教育委員会
編集　長野市埋蔵文化財センター
印刷　奥山印刷工業株式会社